トリコ　チートを持った転生者

アルトアイゼン・リーゼ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
トリコ　チートを持った転生者

【Ｎコード】
Ｎ７３２４Ｖ

【作者名】
アルトアイゼン・リーゼ

【あらすじ】
大学に通う青年
彼は家に帰る途中に死んでしまう
だが神に会い異世界に行く事になる
彼はどんな明日えお生きるのか？

異世界へ

俺は何処にでもいる大学1年生だ
一応県内トップクラスの大学に通っている
俺は考え事をしながら道を歩いていた

「う～んどうするかな、やっぱりパックをまとめて買おうかな？」
俺は遊戯王のパックの調律がほしくて買うか買わないか悩んでいる

「やっぱ調律がないとジャンクデッキが完成しないだよな」

俺はそんな事を考えて家に向かっていた
するといきなり携帯が鳴った

「もしもし？」
「あ、お兄ちゃん♪今日は早めに帰ってきてね♪今日は私特製のハンバーグだよ♪」
「そうかもう直ぐ着くから大丈夫だよ」
「じゃあ楽しみにしててよ♪」

ピッ
電話を切る
今の会話で分かると思うが今のは俺の妹だ
龍神優奈（たつがみ ゆうな）
俺のたった一人の家族だ
俺の両親は俳優で海外に撮影に向かっている飛行機が事故を起こし死んだ
その時、優奈はずっと泣き続けた

俺だって泣きたかっただけど俺は泣いてしまったら
もう立ち直れない気がした
そうしたら優奈はどうなる？
だから俺はずっと優奈が自分で幸せを掴むまでそばに居ようと誓った

・・・失礼暗い話をしてしまった
生活は両親が十分生きていけるだけの財産を残してくれたので生活費には困っていない
まあ小遣い稼ぎにバイトはしているが
優奈は外人である母の血を強く引いており
金髪の髪に茶色の瞳、年は１１歳
大人しくて少し茶目っ気のある小学５年生だ
容姿は・・・リリカルなのはのフェイトを想像してもらえばいいだろう
そして料理がとても美味しい
特にハンバーグは絶品だこうして話していると
少し早足になってきた

「ふふふ、楽しみだ優奈のハンバーグ♪できれば沢山食べたいな♪」

だが俺の願いは叶うことはなかった
青になった信号を確認し横断歩道を渡っていると
横からパトカーに追われた車が迫ってきた
そこで俺の意識はブラックアウトした

・・・俺は死んだのか？

「死んだとは言えませんね」

声がしたので目を開いてみるとそこにはカッコいい男性ががいた

「貴方は？」
「私ですか？私は貴方達で言う所の神ですな」
「え！！？」

俺は目を限界まで見開いた

「そ、そこまで驚かなくても」
「無茶言わないでください！！！目の前で神がいたらびっくりしますって！！
・・・失礼しました、取り乱してしまって・・・」
「いえ御気になさらず」
「（神様がこんなに腰低くていいのかな？）
「これは私の性格でして」
「！？声に出てました！？」
「いえ読心術が使えるだけです」
「そ、そうなんですか・・・すみませんが質問してもいいですか？」
「いいですよ」
「俺は・・・死んだんですか？」
「はい」

はっきりと神は言ってきた
その言葉が俺の心を抉る
優奈を一人にしてしまった・・・
俺は泣きそうになった

「でも貴方はもう一度人生をやり直す権利があります」
「え？」
「貴方は生前、妹さんの支えになるためいろんな事をしていましたね
その事は多大に評価できます、それに貴方は困っている人がいれば

救いの手を差し伸べてきた
それが理由です」

俺は神の言葉で希望が出てきた

「ほ、本当ですか！？」
「ええ」
「じゃ、じゃあ俺を生き返らせてください！！」
「・・・それは無理です」
「・・・え？・・・」

俺の希望が完全に撃ち砕かれた

「死んだ人間が同じ世界に行くのは無理なんです、すみませんでも
貴方の願いは叶えてあげます」

願いって・・・俺の願いは生き返ることだって・・・願い・・・！？

「じゃ、じゃあまず妹の願いをかなえてあげてください！」

神は驚いたように聞いてきた

「妹さんの願いをですか？」
「はい、あいつは俺が幸せになるまで俺が守るつもりでした、でも
それはできない
だからせめて優奈には幸せになってほしいです」
「優しいですね、分かりました後貴方が行く世界はトリコですよ」
「え！？でもあれって漫画じゃ・・・」
「あれはどちらかと言えばパラレルワールドですだから可能ですよ」

そうなのかでも危険だよなあそこ・・・

「じゃあ身体能力はＭＡＸ俺の知ってるアニメ、漫画、ゲーム、小説の技、力が全て使えて
イメージしただけでその姿になれる変身能力
後どんな怪我や病気も心の病もどんな物でも治療、修復できる能力をください」
「うんわかった転生したら使えるようにしとくよ、じゃあ扉を開くよ」
「扉？」

神がそう言うと後ろにでっかい扉が現れた

「さあ行ってきて、原作ブレイクしていいから、妹さんの事は任せて！」
「お願いします」

俺は深く頭を下げて扉に入った

VSガララワニ

俺は神が開いた扉を抜けるとそこは森だった
風が気持ちいい
ここは何処だろう？
俺はとりあえず人を探して歩き始めた
・・・何処まで行っても木ばかり
当たり前か森だし

「でも軽く2時間は歩いてるのにぜんぜん疲れないな、あれかグルメ細胞か？」

なんて思っていると沼に着いた

「ちょうどいい少し休憩するか」

俺は沼の近くに座った

「にしてこれからどうするかなぁ、いくらチート持ってたって経験がないからなぁ・・・優奈元気にしてるか～・・・」

妹が元気でやってるか心配だ
その時！
シャロロロ・・・バキ！ゴキ！モキャ！ゴキャ！

「へ？」

後ろを向くとガララワニが沼蛇を捕食していた
骨を噛み砕き肉を食いちぎりながらこちらに向かっていた

沼蛇（ぬまへび）

沼の泥中に身を潜めている巨大な水蛇
そのため、発見が非常に困難であり、沼蛇に攻撃の意思がある場合、
高確率でフイ打ちを食らうことになる
沼の中に限ってはガララワニといえど、うかつに手を出せない。

生息地：沼の中
体長：２０メートル
体重：９トン
価格：１００ｇ／７０００円

沼のような濁った水域を好んで棲息する蛇の一種
警戒心が強く、あまり水上に出ないため、捕獲レベルも戦闘能力に
比べ、割高に設定されている
蛇の一種だが、一部脂がのった部位は、ウナギの味に似ているため、
蒲焼にすると旨いと評判である

捕獲レベル：５
分類：爬虫獣類

ガララワニ

真紅の鱗に覆われた巨大な多足ワニ
世界最高ランクのワニ肉として知られる
その捕獲レベルの高さから、通常の手段での食材調達は困難
非常に力が強く、７６ミリの鉄筋を割り箸のようにへし折るほど
夜行性なので、狩りは動きの鈍い昼間に行うのが定石
モモ肉など部位によっては小売でｋｇ単価５０万円は下らない

ＩＧＯがトリコに捕獲を依頼した際の報酬提示額は、ｋｇ単価２０万円（５００ｋｇの個体で１億円）だったが、トリコは倍のｋｇ単価４０万円を要求した
通常１５０年近く生き、加齢と共に食欲や獰猛さが強くなり、危険度が増す
通常は淡水の湿原に棲むが、海水にも適応可能。繁殖力が弱い反面、個体の寿命が延びてきているというデータもある

生息地：湿原・沼
体長：１８メートル
体高：４．２メートル
体重：１３トン
価格：部位によって違うが、モモ肉は１００ｇ５万円

バロン諸島の生態系の頂点に君臨する巨大なワニ
繁殖能力は低いが、その分、生存力が強く、種の中には３００年以上生存する個体もいる
一般的に鳥肉に近い味だと言われるワニ肉だが、長年生きて成熟したガララワニの肉は、最高級のブランド和牛のサーロインにも匹敵する脂のノリと旨みがあるという
今まではハンティングする以外に捕獲する方法はなかったが、近年ＩＧＯがクローン生産に成功したため、近いうち大量生産も可能になるだろう

捕獲レベル：５
分類：爬虫獣類

「おいおいガララワニって此処バロン諸島かよ！」
「シュ～～カロロロロガロォオ～～！！！」

ガララワニは尻尾で地面を叩きつけその反動で突進してきた

「うわ！」

なんとかダッシュで射線上から退避して避わす

「あぶね～さてどうするか・・・

1　戦う　2　逃げる　3やっぱ戦う・・・何だよやっぱ戦うって・・・

まあいいか力を試すいいチャンスだ、行くぜ！剃！」

六式の剃を使いガララワニの横っ腹に回り込む

「行くぜ！せぇい！」

腹に超高速で連続でパンチを決めていく

「白虎咬！！おりゃあ！」

最後に手にエネルギーを収束させてそのまま腹に決めた

ガララワニは吹き飛んだが空中で態勢を立て直し着地した

「・・・白虎咬じゃあまだパワー不足かなら！」

俺の両腕にソウルゲインの腕をアーマーとして出現させる

「狙いは外さん！」

腕が高速回転を始める

「ロケット・ソウルパンチ！もとい玄武剛弾！」

ついアホセルで言ってしまった
アーマーのみを飛ばし顔を殴る

「ガロォオオ！！！」
苦しんでるな

「止めだ！」

右腕だけ回転させ脳天を殴りつけた

「カロ・ロォォ・・・」

ドシ～ン！！

「ふうガララワニお前の命頂きます」

俺は早速周りの木の枝を薪にしてガララワニを焼き始めた

「う～んいい匂い！そういえば俺にグルメ細胞ってあるのかなぁ？
ライブラ！」

う～んライブラで探してるけど・・・あった！
やっぱグルメ細胞あるのか、トリコ並みに食べなきゃダメなのかな？

「お！焼けた～！まずは食事だ！いっただきま～す！あむっ」

クチュ、モグモグ、ゴクン

「うめ～！！舌に乗せるだけで肉汁が溢れ出てくる！そしてしっとりとしつつこの歯ごたえ！うま～い！！やばい止まらない！やみつきになりそうだぜ！」

俺はそのままガララワニを食い続けて骨になるまで食い続けた

「ぷふぃ～～美味しかったな～これなら一切れ１０万相当する理由も分かるなさてグルメ界で修行でもするかな」

俺は翼を出してグルメ界の入り口、ザーベル島の命の滝壺に向かった

いざ！グルメ界へ！

俺はグルメ界の入り口のザーベル島の命の滝つぼに飛び込もうとしていた

「ここから落ちて死んだら洒落にならないな・・・確か次郎は此処が一番入りやすいって言ってたけど本当か怪しいな」

俺は覚悟を決める事をした

「よし！龍神　龍人行くぜ！」

俺は腹を括って滝つぼに飛び込んだ

凄いスピードで降りていくというか落ちていく

ビュオ〜〜！！！

ん？地面？やべ！このままだとぶつかる！

「髪ネット！！」

地面すれすれで髪ネットで勢いを殺し着地に成功した

「にしても体が重いな〜あれだけ降りたから重力が強いのかな？」

此処はアングラの森

命の滝壺の入界ルート入口にある森

人間界から見て、海抜がマイナス2万メートルの場所に存在する。

地上より地球の核に近いため、その影響で重力が強く作用している。

トリコですら歯が立たない凶暴な猛獣や、人間界の常識を超えた不

思議な植物も数多く存在する

すると後ろから何かが迫ってきた

デビル大蛇だ

「ギオ〝ア〝ア〝オ〝ギャア〝ア〝！！！」

デビル大蛇（でびるおろち）

地獄から来た魔獣、と呼ばれる伝説の魔獣

太古の昔、最強と謳われたバトルウルフと肩を並べたと言われる

トリコの威嚇、ココの毒をも恐れず、爆音にも動じない

紫色の皮膚・髪の毛と、漆黒の牙・爪を持つ多足の大ヘビ

体全体が伸縮自在なので、攻撃を予測しづらく、間合いをはかることも困難。また、皮膚を限界まで縮めることで、硬度と耐久力を上げて身を守ることができる

鳴き声は「ロ〝ロ〝ロ〝ロ〝」

「ギオ〝ア〝ア〝オ〝ギャア〝ア〝」という凄まじい雄たけびには、精神力の低い者の意識を混濁させる効果がありそう

口からは強力な消化液を吐き、足を切り落とされても瞬く間に再生させてしまう

髪の毛からは毒液を分泌し、飛ばすことも可能だが、獲物の体に直接、毒針のように打ち込むこともできる

全方向を見ることが可能な３つの眼と、顔中に点在するピット器官により、暗闇の中でも獲物を見失うことはない

生息地：暗い洞窟の中

体長：３５メートル～４０メートル

体高：一

体重：１７トン

価格：１００ｇ／１５万円

地獄から来た魔獣と恐れられる大蛇
熱で獲物の位置を感知するピット器官や、獲物を仕留めるための飛び道具の猛毒など
暗闇での闘いはかなり苦戦を強いられる
また、デビル大蛇自身がダメージを受けても瞬時に肉体が再生する細胞、万能細胞で構成されているため、捕獲するには万能細胞ごと破壊する強力なダメージを与えるか
高度なノッキングを行う必要がある
洞窟の砂浜にいたデビル大蛇は、捕獲レベル２１だが、地球のどこかには、もっとレベルの高いデビル大蛇が生息しているというウワサもある

捕獲レベル：２１
分類：爬虫獣類

「きっしょ～！！」

サニーみたいな事を言ってしまう
だってマジでキモイだもん

「ロ〝ロ〝ロ〝ロ〝！！！」
「うるせ～よ！！」

コイツの声はめちゃくちゃ煩い耳が～！！

「ギオ〝ア〝ア〝オ〝ギャア〝ア〝！！！」

という凄まじい雄たけびを上げて突撃してきた

「クッ！剃！」

剃で避わしたがピット器官で俺の位置を把握したのか手を伸ばし足を掴んで投げ飛ばされた

「ぐう！くっそ！青龍鱗！」

手にエネルギーをため青龍鱗を放ち腕を吹き飛ばすが瞬く間に再生されてしまった

「くそ！このままじゃあ・・・」

「ギオ゛ア゛ア゛オ゛！！！」

こちらに向かってくるデビル大蛇

「こうなったら！リミット解除！おっりゃ！！」

ジャンプをし青龍鱗を一気に連射する

煙でデビル大蛇が怯んだ隙に一気に距離を詰め

連続でパンチとキックを決め続ける

アッパーを決め大蛇を殴り上げる

「コード麒麟！！」

すでに展開してあったソウルゲインの腕の肘ブレードにエネルギーを纏わせ大蛇に向かってジャンプする

「決める！おりゃ！」

デビル大蛇を尾から一刀両断する
なんとかデビル大蛇をしとめることに成功した

「俺もまだまだな」

俺は此処で修行する事で高みを目指す事にした

美食屋

さて改めまして自己紹介だ
俺の名前は龍神（たつがみ）　龍人（りゅうと）
俺はグルメ界で修行を始めて7年、俺は25歳になった
グルメ界はもう俺にとって快適な所になってきた
最初は天候やら猛獣やらで死ぬと思ったけど
そして・・・とんでもないのが俺に懐いちゃった

デーモンデビル大蛇・・・
デビル大蛇の亜種で捕獲レベルは25
俺がご飯の調達に行った時に
阿修羅タイガーに襲われていたので助けたら懐かれてしまった
こいつ見た目はおっかね～のに結構な甘えん坊だ
だが腕は一流最近
では推定捕獲レベル85のジャックエレファントを倒せるまでに成長した
なかなかいい相棒だ
少し不気味だがな
因みに名前はジャコウ

「ジャコウそろそろ人間界に戻るけどお前も来るか？」
「ギュルル？」
「どうする？これからビオトープに行って美食屋になろうと思うんだけど？えっと確か第8でやってた気がする」
「・・・」

ジャコウは何本ある手を組んで考えている
人間くさいなジャコウ・・・

「ギャオルル！！」
「お！来るか！？」

ジャコウは勢いよく首を縦に振った

「よし行くか！」
「ギオ゛ア゛ア゛オ゛ギャア゛ア゛！！！！！！」

ジャコウは雄たけびを上げた

「だあ～～！！！うるせ～～！！！耳が～～～！！！」

俺はジャコウと供に第８ビオトープに向かった

その途中・・・

「ギュルル」
「ん？どうした？」

ジャコウは自分の頭の上を指で指す

「？？？乗れってことか？」
「ギュル♪」
「分かった分かった」

俺はジャンプしジャコウの頭の上に乗って第８ビオトープに向かった

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ーーーーーーーーーー弟８ビオトープーーーーーーーーーーー

ビオトープガーデン

通称「庭」

ＩＧＯが動植物の生態調査や繁殖などを目的として世界各地に建造したビオトープ兼超巨大養殖場兼実験場で
それぞれが島１つ分の広大な敷地面積である
中でも第１ビオトープに当たるリーガル島は５０万ｋｍ？（北海道の約６倍）もの面積を誇っているらしい
また、周囲を分厚い壁と堀で取り囲むなど、猛獣が逃げ出さないための措置をとっている
トリコ達四天王のかつての修行場でもある。ここの食材を無許可で庭の外に持ち出すことは重罪とされている
様々な動植物の繁殖に成功してはいるものの、その中には危険な種類も多く
それらの採取・捕獲の手段は確立されていないのが現状のようで、庭の中の食材の捕獲のために美食屋に声がかかることもある

「にしてもでかいな～」
「ギュル～～」

第８ビオトープ通称「庭」の目の前に俺達はいる
ここで美食屋になるためのテストが行われている

「よし行くぜ！ジャコウ！すっすめ～！！」
「ギオ゛ア゛ア゛オ゛！！！」

ジャコウに乗ったまま入っていく

第８ビオトープ研究所内

ここでは試験の準備が行われていた
職員がガラスから会場を見ている男に話しかける

「ママママッマンサム所長〜〜！！！！」
「なにぃ！ハンサムっていった！？」
「言ってません！！」

職員は勢いよく手を顔の前で横に振る

マンサム

ＩＧＯ開発局長兼グルメ研究所所長
ＩＧＯでは会長・副会長に次ぐ実質的なナンバー３の存在と言われている
細かいことにはこだわらない豪放な性格で、名前を呼ばれるたびに「今ハンサムと言った？」
と聞き返したがるが、まわりの人間からは即座に否定される
大変な酒豪で、常に酒の入った瓶を持ち歩いており、フルコースも全て酒に関係したものである
トリコにも劣らぬ筋骨隆々の体格をしているスキンヘッドの中年男で、超人的なパワーを誇る格闘術の達人
得意技は力任せに相手をぶん殴る「フライパンチ」
両手でのフライパンチで相手を挟み込む「フライパンサンドイッチ」
痛覚を麻痺させており、腹や喉元を貫かれたりしても何事も無かったかの様に振る舞う
また、両肩をノッキングすることで筋肉を肥大化させるといった肉体操作も可能なようである

「で何じゃいったい？」
「はっはい、試験の事でお伝えしたい事が！！！」
「なに！？ば～っはっはっはっは！！！いい奴でもいたか？」

これは名目上は美食屋の認定試験だが
裏ではトリコを始めとする四天王の修行相手
美食會の敵と戦えて捕獲が難しい食材を調達ができる
有力な人物を探さすためでもある

「そそれが！途轍もなく大きい蛇に乗った青年が試験を受けると！！」
「蛇？ばっはっはっは！！！そいつは期待できそうだな！おっし！見に行くぞ！」
「はっはい！」

マンサムは試験会場へと向かった

ーーーーーーーーー試験会場ーーーーーーーーーー

「お～広いな～」
「ロロロロ」

俺の目の前には大勢の美食屋希望者がいる

「ん？ぎゃ～～！！！ななな、何だあのでっかい蛇～～～！！！」

まあ驚くの当然か

「あ、あれって伝説の魔獣！デーモンデビル大蛇だ～～！！！」

「なんでそんなのがここに！！」
「おおい見ろ！頭の上に人がいる！！」
「ほんとだ！！！」

とにかく周りは騒がしかった

「ぬお！！あ、あれはデ、デーモンデビル大蛇！でかい蛇っていうのはあれだったのか・・・
にしてもあの頭に乗っている小僧デーモンデビル大蛇に懐かれてるな、甘えとる」

視線の先には龍人が頭をなで気持ちよさそうにするデーモンデビル大蛇の姿があった

「それにしてたいしたもんだあの伝説の魔獣と謳われているデーモンデビル大蛇に懐かれているとは・・・
ばっはっは！！！面白い奴が来たもんだ！おい！試験が終ったらあいつに会いに行くぞ！」
「はっはい！」

マンサムは試験を前にして映画を楽しむように嬉しそうに微笑んだ

「ではこれより試験を始めます、合格方法は簡単、制限時間内に猛獣を一匹でも倒すか
制限時間以内に逃げ切れれば合格となる
では私が出たら試験が始まる、諸君の食運を祈る！」

職員は会場から出て行った

「まずは様子見だな」

「ギュルル」

そして試験は始まった

ところが・・・

「うわぁ～～～！！！！」

「ぎゃあ～！」

「た、助けて・・・」

う～ん・・・カオスだなこの状況

猛獣に追われる者

断末魔をあげて食われる者

倒される者

「さてそろそろ行くか、ジャコウはここで待ってな」

「ギュウゥゥゥ」

え～みたいな顔をする

「これは俺の試験なんだから分かった？」

「ギュ～～」

ジャコウは渋々承諾してくれた

「ついに動くかあの小僧待ちくたびれたぞ」

マンサムは酒を飲みながら龍人を見る

俺は猛獣が群れている所に突っ込み

「行くぜ！デストロイナックル！！！」

連続でパンチの衝撃波を飛ばし猛獣たちを仕留めていく

「おお！！衝撃波を飛ばすとはなぁ！ばっはっはっはっは！！！面白い奴だ！！」

気がつくと制限時間は過ぎ試験は終った

俺はジャコウの頭の上に乗り帰ろうとしたら

「ちょっと待てい！」

止められた

「ん？なんですか？」

「わしはマンサム、合格おめでとう！どうだデーモンデビル大蛇を見せてくれた礼にこれからどうだ！宴会でも！」

「マジッすか！？こいつもいいですか？」

俺はジャコウを指差す

「ああもちろんいいぞ！！だたしでかいから外でやるぞ！」

「やった～！！」

「ギオ゛ア゛ア゛オ゛ギャア゛ア゛！！！」

「だからうるさいって～の！！！」

酒尽くしのフルコースと師匠

俺は今マンサム社長のお言葉に甘えて宴会に参加している
もちろんジャコウも一緒だ
目の前には大量の料理が並んでいた

「おお～～～！！！」
「ギュルルルル♪」
「ばっはっはっはっは！！！さあどんどん食え！大量にあるから遠慮するなよ！わしのフルコースを全部出してやる！」
「所長のフルコースってなんですか！？！」
「オードブル　酒盗エスカルゴ！　スープ　酒貝のスープ！　魚料理　バッカスシャーク　！　肉料理　酒乱牛　！　メイン　バッカスドラゴン！　サラダ　バッカスオニオン！　デザート　酒豪メロン！
ドリンク　バッカスホエールの潮だ！」
「すっげぇ～！バッカスドラゴンって超高級食材じゃん！！」

酒盗エスカルゴ　（しゅとうえすかるご）
捕獲レベル：２８
酒貝のスープ　（しゅかいのすーぷ）
捕獲レベル：２５
酒豪メロン　（しゅごうめろん）
捕獲レベル：１９

バッカスシャーク　（ばっかすしゃーく）

捕獲レベル：３１

バッカスオニオン　（ばっかすおにおん）

捕獲レベル：１５

バッカスホエールの潮　（ばっかすほえーるのしお）

捕獲レベル：３３

トリコデータベースに詳しい事が乗っていなかったので捕獲レベルのみ

バッカスドラゴン　（ばっかすどらごん）

バッカス島の主であるドラゴン
超高級食材として知られている
その肉はアルコールを含み、まるでブランデーのような芳醇な味わい

生息地：バッカス島
体長：４８メートル
体重：２２トン
価格：１００ｇ／１８万円

酒の楽園と謳われるバッカス島の主として君臨する竜
アルコールを含んだ肉は芳醇なブランデーを思わせる味として有名である

ちなみにバッカスドラゴンは全身にアルコール分を含んでいるため、
２０歳以下は食べることを禁止されている
まさに子供にはわからない「大人の味」と呼ぶに相応しい食材である
捕獲レベル：３７
分類：翼竜獣類

酒乱牛（しゅらんぎゅう）

アルコールを多分に含んでいる（と思われる）極上の肉
食べた者を酒に酔わせ、味に酔わせ、その相乗効果で酩酊させる

生息地：バッカス島
体長：９メートル
体高：３．５メートル
体重：８トン
価格：１００ｇ／２万５千円

バッカス島に生息し「酔いどれ暴れ牛」と異名をとる哺乳獣類
バッカス島のアルコールを含んだ湖の水を飲料水としているため、
常に酔っ払ってフラフラしているか、酔えば酔うほど凶暴さが増す
厄介な牛

捕獲レベル：３０
分類：哺乳獣類

俺は酒乱牛に手を付けた

「美味しい！何これ！？サーロインの旨みと日本酒のまろやかさそ
の両方を備え持つみたいだ！」

マンサムはビアロブスターにかぶりついた

ビアロブスター　（びあろぶすたー）

殻の中には、ぷるぷるの身がつまっている
ビールのツマミに最適

生息地：温暖な海域
体長：５５ｃｍ
体重：２ｋｇ
価格：１匹／９万円

伊勢海老の一種でアカザエビ科
温暖な海域に生息し、その身はプリプリと引き締まって歯ごたえ抜群
味はそのままでも天然の塩気がきいているため、その名の通りビールのツマミにピッタリの食材である

捕獲レベル：１以下
分類：甲殻類

「う～んこのプリップリ歯ごたえ！この塩加減！美味い！！酒が進むわい！」

マンサム所長はジョッキに注いであったビールをがぶ飲みした

「ギュルルルル♪♪♪」
「美味いな～♪」
「あ～そうだお前な名前は？」
「龍神　龍人です」
「龍神か、良い名だ、龍人はこれからどうする気だ？」

「う～んとりあえず修行でもしようかな～って考えてます」
「ではいい師匠を紹介してやろう」
「え？誰ですか？」
「ＩＧＯ会長　一龍さんだ」
「え～！！！会長って！！？」
「ギュル？」

一龍会長といえばこのグルメ時代トップに立つ人間といっても過言ではない

「なんでそんな人が俺の師匠に？」
「試験の事を上に報告したら会長がお前さんに興味を持ったんだ」
「あっなるほど」
「明日にでも行って来い！」
「明日！？」
「早いほうがいいだろう？」
「まあそうですけど」
「おっし！そうとなれば乾杯だ～！！！」
「さっきからずっと飲んでるじゃないですか？」
「細かい事は気にするな！ばっはっはっはっは！！！」

その後一日中宴会は続いた・・・

次の日
俺は所長のご好意で会長のいる家まで送ってもらった
周りはガラスのように澄んだ海に囲まれた小さく別荘っていう感じだ
俺はインターホンを押す
ピ～ンポ～ン
すると中から小柄な男が出てきた

「これは！これは！お待ちしておりました龍人様！ささ会長がお待ちですどうぞ此方へ！」

俺は案内されるまま歩いた
するとテラスについた
なんかパラソルが建ってるな

「あそこに居られるのが会長で御座いますでは私はこれで」

男は下がった

「・・・（まずは挨拶だな）お初にお目にかかります会長、俺はじゃなくて！
私の名前は龍神　龍人と申します」
「おお、お主が龍人君か？」
「はい」

パラソルの下のいたのは国際グルメ機関ＩＧＯ会長　一龍さんだった

一龍（いちりゅう）

ＩＧＯ会長
トリコ達「四天王」の師匠で、彼らの親代わりでもあった模様（トリコは一龍を「オヤジ」と呼んでいる）
見た目は派手でお調子者だが、弟子達の事を絶えず気にかける深い思いやりを持った老人
約５００年前に美食神アカシアの一番弟子であったと語っており、正確な年齢は不明
すでに美食屋を引退している身であるが、その驚異的な身体能力と

戦闘力はいまだ衰えていない
トリコが「四天王」と呼ばれるようになった今でもトリコを完全に子供扱いしており
アイスヘルでの死闘を乗り越えてパワーアップしたトリコの全力の技を簡単にあしらうほどの強さを誇っている
ＧＯＤの出現がアカシアの予想通りに新たな戦争を招くであろう事態を危惧し、戦争の勃発を事前に阻止するため、自らの命を賭けて最後の使命に臨もうとしている

見た目はチーターのようなの模様のシャツを着てサングラスをかけている
・・・派手（ファンキー）だな

「マンサムの話だとデーモンデビル大蛇を相棒にしていると聞くがどこでじゃ？」
「グルメ界です」

俺は即答した

「ほう、グルメ界で」
「はい、ジャコウは俺が食量の調達をしている時に阿修羅タイガーに襲われていたのを助けたら
懐かれたんです」
「なるほどの～どの程度強いかの？」
「え～と・・・ジャックエレファントを簡単に倒せるまでに成長しました」
「！ほう・・・捕獲レベル８５をの～因みに君をどの程度グルメ界にいた？」
「７年です」
「随分と長いな、では実力は十分というわけか・・・よし！」

会長は立ち上がり手のひらを俺に向けてきた

「？」

「お主の技を打ってみぃ」

「ここで？」

「そうじゃ遠慮はいらんぞ？」

「では・・・」

俺は集中し右腕に力を込め武装色の覇気を右腕に纏わせ腕を高速回転させる

「ほぉ！腕を高速回転させる事ができるとはな」

「うぉ～！！玄武金剛弾！！」

玄武剛弾の強化版を会長の手に決める

だが手は１０数センチほど後ろに下がっただけだった

「ほぅ！！トリコの釘パンチを遥かに上回るほどの威力だ」

「うっそ～・・・ぜんぜん効いてない・・・」

「少し堪えたぞ、腕が痺れてしまったわい」

「痺れただけですか・・・」

マジでショックだ

玄武金剛弾はジャックエレファントを一撃で粉砕するパワーなのに腕が痺れる程度とは・・・

「弟子になるには合格じゃこれからもっと強くしてやるぞ」

「はい！お願いします！」

「じゃあまずは第１ビオトープに行ってロックドラムを捕獲してき

てくれ」
「ロックドラムを？」
「後ピグマ、バラック、ドムもじゃぞ？」
「増えた！？」
「じゃあ龍ちゃん♪頑張るんじゃぞ♪」
「は～い・・・・・・・」
俺は渋々第1ビオトープに向かった

キャラ紹介

龍神龍人（たつがみりゅうと）

性別　男

年齢　転生前　１８歳→　転生後　１８歳→　グルメ界での修行終了時　２５歳

身長　転生前　１８５ｃｍ　グルメ界での修行終了時　２１８ｃｍ
（グルメ界の食材が栄養が豊富だったため）

体重　転生前　６９ｋｇ　グルメ界での修行終了時　９８ｋｇ　四天王の三人より軽い

容姿　上の上　性格が優しいためとてもモテた、だが男子生徒からは嫉妬の目で見られていた　服装は黒い長ズボン
腕や脇腹の部分に赤と黒の龍が描かれている服を愛用している

引用　技などはスパロボのソウルゲインの技をよく使う（人体でやりやすいから）
身体能力はＭＡＸ
能力は知っているアニメ、漫画、小説、ゲームの技、力が全て使える
イメージしただけでその姿になれる変身能力
どんな怪我や病気も心の病もどんな物でも治療、修復できる

能力
だが基本的にはソウルゲインの腕や剣などを作り出すだけ

ジャコウ

デーモンデビル大蛇

推定捕獲レベル８８（ジャックエレファントを倒したため）　通常は２５

阿修羅タイガーに襲われていた時に龍人がご飯の調達をしていた時に助けられそれ以来龍人に懐いた

龍人のためなら危険を省みずに戦う

性格は甘えん坊

戦いとなると牙をむく

好物はホワイトアップルとカニ豚、ピグマ、ブラックカーペット

グルメ界でも野菜を食べていた

龍人に頭に乗ってもらうのと撫でられるのが大好き

体長は４８メートル

体重は１９トン

通常のデーモンデビル大蛇より鋭いピット器官と牙と爪

３つの眼はとてもよく暗闇でココほどではないが見える

ダメージを受けても瞬時に肉体が再生する万能細胞を持っているが

さらに龍人がグルメ細胞を与えた

頭を吹き飛ばされても再生することが可能となった

毒もココ並の毒を生成することができるようになった

皮膚も縮めなくてもトリコのナイフも傷ひとつ付かなくなった

妹

俺は第1ビオトープから帰った後師匠の3ヶ月特訓を受けていた
それで筋がいいといわれて3日間の暇を貰った
俺はグルメフォーチュンの近くの草原に寝そべっている
ジャコウは俺の近くで眠っている

「・・・はあ、この世界に来てもう7年以上もたつのか・・・」

俺が死亡して神の手によってこの世界に来て既に7年に以上もの時が流れた

「にして大変だったな～最初はいきなりガララワニでその次は修行で行ったグルメ界でデビル大蛇に阿修羅タイガー
7年間もグルメ界で修行してそれから美食屋になって師匠の弟子になっていろんな食材とったり酒飲んだり師匠にボコられたり考えてみるといろんな事があって死に掛けたり濃厚すぎる毎日だったな～」

俺はよく今まで自殺しなかったな～っと思う
いろんな事があったけど一番の願いがある
絶対に無理な事だ
でも望んでしまう

「・・・優奈・・・」

妹に会いたい
自分で言うのも別にシスコンってわけじゃない
俺のたった一人の家族だ
だから会いたい・・・

？

「あれ？おかしいな？涙が出てきちまったよ・・・そうか俺・・・寂しいんだな・・・」

ジャコウは俺の様子に気がついたのか顔を舐めてきた

「ジャコウ・・・ありがとな俺の相棒で居てくれてありがとな」

「ギュルルル♪」

ジャコウは俺が笑うと安心したのかまた眠りに着いた

すると後ろから誰か来た

やっべ、ジャコウみたら絶対に恐がるわ

その人は女性だった

外人を思わせる長く金髪の髪

茶色の瞳

まるでリリカルなのはのフェイトのような人だ

え？いやいやいやいやそれはないって

その人はジャコウよりも俺の顔を見ると驚いて泣き出した

え！？俺なんかした！？

なに！？デーモンデビル大蛇のジャコウいるから！？

「お・・・い・・・・ゃ・・・・」

声が小さくて聞き取れないな

「お兄ちゃん！！！」

その人は俺にダッシュしてきて抱きついてきた

「え！？お、お兄ちゃんって！！ま、まさか優奈！！？？」
「うわぁぁぁあん！！！会いたかったよ～！！龍人おにぃちゃ～ん！！」
「おい！本当に優奈なのか！！？」
「うん！！正真正銘のおにぃちゃんの妹の龍神優奈だよぉ～～！！！」

優奈は泣きながら俺をもう二度と放さんばかりに俺を抱きしめてくる
「うわぁぁぁあ～ん！！うわぁぁぁあ～！！お兄ちゃん！！！」
「優奈・・・優奈・・・俺も・・・会いたかった・・・」

俺も自然と優奈を抱きしめた
その状態のまま１５分は経過した

「落ち着いたか？優奈？」
「うん」
「そうか・・・でもなんでお前がこの世界に・・・」
「お兄ちゃん死んじゃって目の前が真っ暗になったの、そしたら神様が私の願いを叶えてくれるって言ってくれたの」
「（神様・・・俺の願い聞いてくれたんですね・・・）」
「私はお兄ちゃんのそばに居たいいったのそれでお兄ちゃんに劣るけど能力を貰って１３歳にしてもらってこの世界に来たの」
「なぜ１３？」
「だって１３歳にお兄ちゃんが良い物くれるって言ってたじゃない」
「ああそういう事」
「それで優奈はまずは力を付けるためにグルメ界で能力を駆使して５年間修行したの
それで自信がついたから美食屋になって生活費を稼ぎながらお兄ちゃんの情報を集めてたの」

「なるほどな」
「でもぜんぜん集まらなかったの」
「そりゃそうさ俺は7年間グルメ界に居たんだから」
「そうなの？でもお兄ちゃんに会えてよかった本当に・・・グスッ」
「ホラホラ泣かないのこうやって会えたんだからいいじゃないか」
「うんでもこの7年間寂しかったよぉおにいちゃん！！
もう優奈をひとりにしないでよぉ・・・
優奈の傍に居てよぉ・・・
おにいちゃぁぁん・・・」

俺は優奈の辛さと悲しさを理解した
俺はそっと優しく優奈を抱きしめた

「お、にぃちゃん？」
「優奈、お前はどうしようもない馬鹿だな、俺の傍に居たいから追ってきたぁ？何言ってんだよお前は？
後先考えず行動するのはお前の悪い癖だな、だけどありがとう俺も優奈に会いたかった
どんなどんなに望んでもお前には会えないそんな現実は辛かったたった一人の家族に会えないなんて辛すぎる・・・
だけどこれからは一緒だ、一緒にご飯を食べよう、一緒に歩こう、一緒に居よう、お前が望むなら俺は優奈の傍にいる」
「本当？一緒にいていいの？」
「ああ優奈が望むならな」
「望むよ！お兄ちゃんと一緒に居たい！！」
「はいわかりました、後ジャコウ、何ニヤけてるんだよ」

ジャコウは俺たちのほうを向いてニヤニヤしている
コイツ本当に人間くさいな

「お兄ちゃんこの子デーモンデビル大蛇だよね？なんでこんな所にいるの？」
「コイツはジャコウグルメ界であった俺の相棒だ」
「へぇ～宜しくねジャコウ♪」
「ギュルルル♪」
「あははお腹が減ったみたな鳴き声だね♪」

この後俺は師匠の所に出向き優奈を生き別れた妹と説明して弟子にしてもらった
やれやれこれからの人生大変そうだ、はあ・・・

ついに原作突入！虹の実を採れ！

師匠の下で修行を始めてすでに7ヶ月
ちょっと前までトリコ達の修行相手として俺は抜擢された
ゼブラは居なかったが
それにしても皆の素質は途轍もなく高かった
流石は四天王だ
トリコのナイフで腕が切断されようになったし
ココの毒は神経毒で痛かったし
サニーはヘアロックしてきたりするし
まあとにかくと筋は良かった、まだまだだけどな
俺と優奈は修行一区切りにすると言われて暫らくの暇を貰った
優奈はこの休みを利用してライフでのんびりすると言って出かけていった
一応癒しの国だしね
俺はとりあえず休み中の費用を稼ぐために沼蛇を捕獲しこのグルメ市場中央卸売市場に来ている
沼蛇を売るためだ
すると人だかりができている

「なんだ？」

俺が顔のぞかせるとトリコがシャクレノドンを地面に下ろしていた

シャクレノドン

山奥の洞窟に棲むドラゴン
巣穴に骨が転がっていたことから、肉食と思われる
体重は約1トン

トリコはトムとｋｇ単価３～４万円で取引をしていたが通常のグルメ相場では、もっと高価のようだ

生息地：山岳地帯、崖
体長：５メートル
体高：３メートル
体重：１．５トン
価格：１００ｇ／９０００円

山岳地帯や崖の洞窟などに棲息する翼竜獣類
顎がしゃくれているために「シャクレノドン」と呼ばれているが、そのユニークな名前とは裏腹に部位によっては卸値で１キロ６万円する高級食材でもある。肉以外にも骨から非常にコクが深い良いダシが出るため、シャクレノドンの骨からダシをとった「シャクレラーメン」は舌が肥えたラーメンマニアたちの間でも人気を博している

捕獲レベル：４
分類：翼竜獣類

「トリコ久しぶり」
「お～！龍じゃね～か！何だお前も来てたのか」
「ああ、沼蛇を捕獲してさ売りに来たんだ」
「でぇ～！？沼蛇～！？捕獲レベル５！トリコさんが捕獲したシャクレノドンより上ですよ～！？」
「相変わらずのノッキングの腕だな」
「まあね」
「凄い！捕獲レベル５の沼蛇を簡単に捕獲するなんて～！しかもカリスマ美食屋トリコもいる！なんててんこ盛りな美味しいユース！あんたがトリコね？私ティナ！」

「あ？」
「へ？」
「私グルメＴＶで世界のあらゆる食材を紹介するグルメキャスターなの！トリコ！番組で取材させて！そっちの貴方も！」
「俺？」
「勝手な取材は困りますね」

ヨハネスが取材を拒否しティナはどこかに連れて行かれた

「何もあそこまでしなくても・・・それにトリコさんこの人は？」
「ああコイツは龍神　龍人　ＩＧＯ会長の弟子だ」
「え～～！！！か、会長さんの弟子ぃ～！！？？」

驚きすぎだろ小松君

「こんにちわ俺は龍神　龍人だ宜しくね」
「は、はい僕はホテルグルメでコック長をやらせてもらっている小松と申します」
「宜しくそういえばヨハネスなんでここに？」
「虹の実が実ったのででトリコさんに依頼を」
「「なに！？」」

俺とトリコは声を合わせて驚いた

「に、虹の実！！気温や湿度に合わせて七色に変化すると言われている幻の木の実ですかぁ～！！？」
「ちょ！声がでかいぞ！誰かに聞かれたら・・・！」

虹の実　（にじのみ）

気温や湿度によって七色に味を変える幻の木の実で、自然界では絶滅したと言われている
ＩＧＯが品種改良し、第８ビオトープで実をつけるのに成功した
しかし、重さは９００ｋｇほどの実が地上数十メートルの位置に鈴なりに生るのだから、並みの美食屋では収穫すらできないだろう
虹の実の香りを嗅いだ動物は、反射的に「食べたい」という欲求に支配され、命の危険をも顧みず、その実を食べようとする。理性を忘れるほどの魅力・魅惑は、恋のそれに近いという
２５メートルプールの水に、ほんの一滴、その果汁を垂らすだけで、プール内の水がすべて濃厚で芳醇なジュースに変わってしまうほど果汁濃度が高い
適当な大きさに切り分けられた実から蒸発した果汁は虹を作り、目を楽しませてくれる。
プリンのようにやわらかいが、金のごとき重量感もある
実の温度を保つ際には５℃が最適とされており、微妙な温度変化で味が変化する
完熟マンゴー数百個を凝縮したような糖度、レモンやキウイを凌駕する酸味、甘栗のごとき香ばしさなど、口内で７段階に味を変える
爆発的な存在感は、「うまい」の一言に尽きる
現在はＩＧＯによる人工生産が可能

生息地：栄養豊富な土地（ＩＧＯ第８ビオトープ内）
体長：１メートル
体高：－
体重：１．５トン～２トン
価格：１個／約５億円

絶滅したとの噂も流れたが、ＩＧＯビオトープガーデンで生息している幻の果実
口にすると体内で味が七段階で変化し、空気中で蒸発した果汁は七

色の虹を架けることから、その名前がついた。虹の実の果汁一滴で２５メートルプールほどの水を果汁ジュースに変えてしまうほど、高濃度のため、食べ過ぎると鼻血が出るので要注意
また、果汁をリキュールで割って作る「レインボーカクテル」は、奇跡のカクテルといわれ、すべてのバーテンダーにとって羨望の的である

捕獲レベル：１２
分類：果実

「問題があり収穫ができないのです、トロルコングが虹の木に巣をつくり近づけないのです」
「トロルコングゥ～！！？？」

トロルコング

ＩＧＯにより品種改良された、最強のゴリラ
濃緑色の体毛と薄紅色の皮膚をもつ
４本の腕は、移動と攻撃を同時に行うことを可能にする
肉は筋っぽく不味いらしい（トリコ談）
その食性は完全に肉食で、動物の肉しか食べない
知能が高く、落とし穴を掘る・毒ヘビを投げつけるなど、獲物を罠にかけることもしばしば
トロルコングの群れは、頭トロルを中心とした完全な縦社会であり、頭トロルの制圧に成功すれば群れ全体を制圧することができる

生息地：主にＩＧＯビオトープ内
体長：―
体高：４．５メートル
体重：２トン

価格：１００g／５５００円

ＩＧＯビオトープガーデン内に生息し、群れをなして生活する
肉は筋ばって食べられたものではないが、脳ミソは独特の旨味で、
一部の愛好家からは珍味として重宝されている
持ち前の腕力のほかに猿特有の高い知能を持ち合わせているため、
戦闘では単純な打撃攻撃以上に、落とし穴や飛び道具攻撃などの狡
猾な攻撃が厄介である
また、群れの中で明確な縦社会が確立されており、ボスの命令には
絶対服従という掟が存在しているが、個々の個性（ヘアースタイルなど）も尊重されていて、
どことなく人間社会に近い集団である

捕獲レベル：９
分類：哺乳獣類

「捕獲の難しさが９！！？この前の３００歳のガララワニが捕獲レ
ベル８ですよ～！！？」
「虹の実食ってみて～し久しぶりに行くか懐かしき庭によ、龍も来
るか？」
「じゃあ行こうかな？」

俺はトリコに同行して虹の実の捕獲に向かった

第８ビオトープに着いたら直ぐにトリコが威嚇のために壁に３連釘
パンチで壁を壊し入っていった

「雨が降りそうだな」
「え～雨嫌いだよ～」
「虹の実の木は高いから雷でも落ちたら大変だぜ」
「じゃあ急ぐか」

「はい！」

トリコがジャンプして着地するとボコッ！！

「え！？」

「あ」

「落とし穴ぁ！！？」

すると上から岩が降ってきた

トロルコングだ

小松君はビビッているので俺はファイティングポーズを取り玄武剛弾を放とうとしたらトリコがノッキングを行った

「お～ノッキングの腕あがったね」

「お前ほどじゃね～よけど舐められてにおいが染み付いちまったぜ」

この後は原作どうりにシルバーバックを手なずけた

「これが・・・虹の実・・・」

「ああさあ1個持って帰ろうぜ」

「そうだな行こう小松君」

「は、はい」

トリコが取ったらヨハネスが来てこっそり着いてきたティナを連行した

今はホテルグルメで食事をしている

「にしてもトリコよく食うな～」

トリコの周りには皿が山盛りにされていた

「だって美味いんだぜ？」

「まあわかるけどさ」

そして小松君が虹の実を持ってきてトリコが食べフルコースのデザートに決定した

「なあ龍、お前は食わなくていいのか？」

「ふっ捕獲したのはトリコお前だ、俺の分も食っていいぜ」

「おお！サンキュ～！」

こうしてトリコは虹の実を堪能した

四天王ココ登場！

俺は今トリコと小松君と共に列車に乗っている
なぜかというと今の時期に幻の魚フグ鯨が深海から浅瀬に上がってきて産卵をするからだ
その時だけが捕獲する事が可能で俺は興味本位でトリコ達に同行した
今は酒を飲んでいる

「あ～うめ～」

トリコは酒の入ったビンの中身を一気に飲み干した

「車内販売のお酒全部飲むつもりですか？龍さんだってそんなに飲んでないのに」
「いや～嬉しくてな～もうすぐ幻の魚フグ鯨に会えると思うとよ～！龍達もそうだろ！？」
「まあね」
「ええ！それはもちろん！深海の珍味といわれるフグ鯨が浅瀬に姿を現すのは１０年に一度ちょうどこの時期だけですからね」
「淡雪のような繊細のフグの身と！脂の乗ったマグロの大トロ！そして鯨の肉を併せ持つ絶妙な味！
たまんねぇ～！！まあ小松は食うよりもフグ鯨を捌ける奴に興味があるんだろ？」
「わ、分かってましたか？」
「フグ鯨はたしか特殊調理食材に指定されてたな」
「ええ、フグ鯨の体内の毒袋を取り除くのは難しく特殊調理食材に指定されるほど」

フグ鯨　（ふぐくじら）

深海の珍味と呼ばれる幻の鯨
卵からかえり成魚になるまで（３～４年）は浅瀬で過ごし、その後は深海で過ごす
肺とエラ両方を持ち合わせるフグ鯨は、浅瀬での３～４年で体長６メートルにも成長するが、深海へ移動する際、水圧で肺は潰れ、体長も３０～４０ｃｍまで圧縮される
これにより旨みが凝縮され、最高の味を生むという
…ただし、それと同時に巨体が持つ大量の老廃物も同時に凝縮され、それが“毒袋”となるのだ

［皮］乾燥させると１世紀以上鮮度は落ちず保存できる

［身］ピンク色の身は、もち肌のようにしっとりとした歯ごたえ。小売で１００ｇ９２万円

［背ヒレ］フグ鯨特有のダシがとれる　毎日とっても約３年は新鮮なダシが出続ける

［舌］上質な脂肪分が凝縮しており、熱するとサラサラの油に変化。丸１年は古くならず揚げ物でも繰り返し使える

［内臓］各種滋養強壮に効果あり　生で食べると、１０日間、不眠不休で働いても疲れない程の精力が得られる

［ヒレ］超辛口の熱燗でヒレ酒にすると絶品　１杯で１週間はほろ酔いが続く

――毒袋――
一度、破れると一瞬にして全身が毒化し、食べると３０分～１時間

で死に至る
致死量０．２ｍｇ、マウスにして１０万匹を殺す猛毒
しかも個体により毒袋の位置が全く違うため、完璧に破かずに除去できる料理人は、世界に１０人もいないと言われる
←
ＩＧＯの定める「グルメ八法」により、毒化したフグ鯨の流通は禁止されているが、毒化しても味は変わらないという理由から、闇ルートで毒化フグ鯨は大量に出回る
「死んでも食べてみたい食材」として、多い年で１０万人が中毒で亡くなるという

特殊調理食材に指定されている
産卵時にはフグと同じくらいの大きさしかないので「ミジンコ鯨」とも呼ばれる
普段は深海ふかくに生息している為、捕獲のチャンスは１０年に一度の産卵期のみ
しかも近年の産卵場は「洞窟の砂浜」に限定されている
浅瀬では身を寄せ合って泳ぎ、まるで巨大な1頭のクジラのように見せかけて外敵から身を守る
非常に繊細で、ほんの僅かな刺激を受けただけで“ぶわお”と毒化してしまう。ノッキングの壺は、エラから頭部の中心へ、斜め４５度の角度
個体により毒袋の位置が異なり、毒袋の位置により捌く手順が変わってくる
その何百通りもある捌き方を正確に記憶した上で、ミリ単位の正確な包丁捌きができなければ、フグ鯨は簡単に毒化してしまう。毒袋の除去に成功したフグ鯨は、まばゆく輝き出す
毒化していないフグ鯨の末端相場は約１億円
毒袋を完全に取り除くと5億円
毒化した場合は0円だが、闇ルートで約８００万円の値がつく。

フグ鯨の刺身は、ピンク色をしており、霜降り牛肉のように脂が乗っている
噛み締めると口いっぱいに脂の旨みが広がり、噛めば噛むほど香りと味が高まり、まるで深海のように底の見えない、終わらない至福をもたらす

生息地：普段は深海だが、１０年に1度の産卵期には浅瀬に浮上する
体長：５０ｃｍ～６０ｃｍ
体高：－
体重：５ｋｇ～７ｋｇ
価格：肉は１００ｇ／９２万円

「深海の珍味」と呼ばれる幻の鯨
幼魚の頃は浅瀬で生息するが、成魚になると深海に移動する
水圧差で約６ｍの体長が５０ｃｍ～６０ｃｍにまで圧縮されるため、その身は旨味が凝縮され最高の味を生み出すといわれる
ただし、体内の老廃物も同時に凝縮されるため、その老廃物が毒袋となり致死性が高い猛毒になる
毒袋は一度破れると一瞬にしてフグ鯨の全身に毒が回ってしまう
しかも個体により毒袋の位置が全く違うため完璧に破かず除去できる料理人は世界に１０人もいないといわれる
ＩＧＯが定めるグルメ八法により毒化したフグ鯨の流通は禁止されているが、毒化しても味は変わらないという理由から闇ルートで毒化フグ鯨が大量に出回り、その毒化したフグ鯨によって多い年で約１０万人が中毒で亡くなるという
まさにフグ鯨が「死んでも食べてみたい食材」と称される所以である。ちなみに毒袋を取り除いた個体は末端相場で5億。毒化しても闇ルートで８００万円程で取引されている

捕獲レベル：２９
分類：魚乳類

「ああ、捌ける奴は世界に１０人といない、まあこれから会いに行く奴は料理人じゃね～けどな」
「え？」

トリコは再び酒に手を付ける

「おいこらぁ～！」
「あ？」

いきなり少しは背が高くいかにも田舎から出てきたような男が怒鳴り込んできた

「酒が少ね～っと思ったらこんな所に沢山あるじゃね～か！舐めやがって！俺は美食屋ゾンゲ様だぞ！ゴラァ～！」
「あ～ん？ふぅ～龍聞いたことあるか？」

情報通である俺に聞いてきた

「いや微塵も聞いたことない」
「やいやいやい！」
「見て驚けよ！ゾンゲ様の人生のフルコースを！」
「オードブルは金色イクラ！　（捕獲レベル２）　スープはヘビガエルの肝スープ！・・・」
「普段僕が料理で使う食材ばかりだ・・・」
「捕獲レベルも低い、たいしたした事ははない」
「そういえば龍さんはフルコース決まってるですか？」
「２つだけね」

「なんですか！？」
「オードブル　ヘルフォートレス　魚料理　鰐鮫だけだよ」
「わ、鰐鮫って捕獲レベル27ですよ！？でもヘルフォートレスって何ですか？聞いた事ありませんが・・・」
「まあそれはそうだろうヘルフォートレスはワールドキッチンにも入ってこない食材だからね」

鰐鮫

１８０　度開口できる大きな口を持つ　魚獣類
鰐並の　強力　な　顎力　で　一度　喰らいついた　獲物は　決して　放さない
その捕獲レベルは　弱肉強食の　食物連鎖で知　られる、いにしえの　沼地でも　一、二を　争うほど　高さを　誇り
まさに沼の主に相応しい実力者である
また、その　肉は　高級で　刺身でもクセがなく　食べられるとか

捕獲レベル：２７
分類：　魚獣類
生息地：沼地から　海まで　広く（ひろ）生息する
体長：４３　ｍ
体重：２７ｔ
価格：１００ｇ／４　万７０００　円

ヘルフォートレス　（オリジナル）

グルメ界に根を下ろす最強の米
ＥＴ米より味が深く濃厚な味がする
何も付けなくても米からあふれ出す甘みとほんの少しの辛味が絶妙にマッチして口に入れた瞬間

意識が飛んでしまうほどの旨みを持つ
その米のとぎ汁は美容と滋養強壮の栄養を多く含みゆっくり温める
事によって圧倒的な輝きを放ち
口にしたら全身の疲れ、肌荒れ、枝毛、疲労回復、肩こり、血行を
良くするなどの様々な効果がある
だが収穫するのは難しい
稲はＢＢコーンより硬く糠も取るには滝並みの水流の強さがないと
取れない
グルメ界の猛獣たちもめったに食べる事ができない
名前の由来は生息する場所が断崖絶壁の崖の上に根を下ろしている
その崖の下は猛獣たちが食物連鎖を繰り広げており骨や血で溢れて
いる
その光景からその崖が地獄に聳え立つ巨大な要塞に見えたためこの
名がついた

捕獲レベル：測定不能

気がつくとゾンビ・・・だったけ？
酒を受け取り去った
その後は次郎が来て酒を渡して俺はトリコ達と雑談をして到着する
のを待った
そして

ーーーーーーーーーーーグルメフォーチュンーーーーーーーーーーー

「はぁ～ここにフグ鯨を捌ける人がいるんですね～ってか人がぜん
ぜんいない」

街には人っ子一人いない
いわばがら～～～ん状態

「猛獣の出る時間だね」
「ああ、ここの居る占い師が猛獣の出る時間帯を占うんだ、その時間住民は家に隠れてるって話だ」
「って言ってるそばから来たぞ」

建物の間から出てきたのはクエンドン

クエンドン

捕獲レベル；１０
翼竜獣類

「煮て焼いても食えね～クエンドンか」
「俺がやってこようか？」
「いやその必要ははないだろう」

トリコが道の向こうを指差す
その先には一人の人が歩いてきた
クエンドンも気付いたようでそちらを向く
その人がクエンドンの前をと通り過ぎようとした時
クエンドンは噛み付こうとした

「あ、危ない！！」

声小松君はを上げるがクエンドンはあと少しの所で止まり
その人が前を通り過ぎるとその場を去っていった
そしてその人がこちらに来た

「僕の占い通りだ、嫌な客と嬉しい客が来たものだ」

「へっ！お出迎えとは嬉しいね流石四天王一の優男だなココ！！」
「ふっ！四天王一の食いしん坊トリコ！久し振りだね！そして君にあえて嬉しいよ僕の大親友、龍！！」
「久し振りだなココ」
「トリコさん、龍さんまさか会いに来た人って四天王美食屋ココ！！？？」

四天王ココ登場！（後書き）

オリジナルの食材を出しました
鰐鮫に関してはコミックを見たため読み方を入れました

不吉な占い

俺達は今ココの家に向かって歩いている

「もう直ぐ僕の家だから」

「はあはあ・・・」

小松君は息が上がっている

「でも四天王のココさんがなぜ占いの街のグルメフォーチュンに？」

「今僕の本業は占い師だからね」

「四天王が占い？」

まあ意外だろうな

「そういえばゼブラの奴はどうした？龍知ってるか？」

「いや、最近は忙しくてねゼブラの事は入ってこないんだ、ココ知ってるか？」

「捕まったよ今はグルメ刑務所だ」

「ははははついに捕まったかあの問題児」

「まったく」

トリコはあさっての方向を向いた

「思い出すぜぇ４人でよぉ死にぐもぬるいで庭で修行した頃ぉ」

「昔の話だよ」

「はあはあ・・・」

小松君が俺達に追いついた頃に俺達の立っている場所が陰になった

上を見ると巨大な鳥が俺達の上を巡回していた

「カラスのオバケェ～！？」
「迎えに来てくれたのかい？キッス！？」
「おお！空の番長エンペラークロウ！絶滅種じゃね～か！」
「えぇ～！？」

エンペラークロウ　えんぺらーくろう

「空の番長」と呼ばれる巨大なカラス

生息地：絶滅種とされているが「グルメ界」のどこかに今でも生息
体長：８．５メートル（キッス）
体高：３メートル（キッス）
体重：５７０ｋｇ（キッス）
価格：１００ｇ／９０万円

「空の番長」と称される絶滅種
カラスならではの高い知能を持つため、飼い馴らせば人間の命令を理解することができる
エンペラークロウの唯一の生き残りといわれるキッスは、ココの大事な家族の一員で、雛の頃からココに育てられたらしい
絶滅種とされているが、地上のどこかに存在する「グルメ界」には今なおエンペラークロウが生存しているとの噂だが真偽のひどは定かではない
キッスはココの言葉を理解し、意見疎通を図ることができる

「僕の家族キッスさ、４人運べるかい？」
「グワァ～」

俺達はキッスの背中に乗りココの家に向かった

ココの家

「僕も賛成だな虹の実をデザートのしたのはまあ僕の占いどうりになったわけだけど」

ココが話している間もトリコはココの出してくれた料理を食い続ける

「つ～かもっと龍みたいに上品に」

俺は静かにゆっくりと食べている

「で？お前はどうなんだよ？人生のフルコースは完成したのかぁ？」

「ああ僕のメニューはリードラゴンの涙のスープやオブレオカジキのステーキなど

栄養バランスのいいメニューを揃えてある、決まってないのはオードブル、メイン、ドリンクの３つさ」

「どれも捕獲レベルも高く値もつけられない物ばかり」

「そんな話をしに来たんじゃないだろう用件は仕事依頼フグ鯨の捕獲だね」

「さすが話が早ぇ～」

「難しい仕事だね僕でも毒化せずに捕獲したとしてそのまま捌くとして僕で１割程度」

「そんだけありゃ十分俺じゃ一匹も捌けないだろうからな♪」

「威張る事か？それ？」

「さらに残念なデータがある」

「洞窟は全長数十キロ深さは８００メートルもあり猛獣もいるそして一番めんどいのデビル大蛇だ」

「龍知ってたのかい？」
「まあねだけど俺も相棒に比べたらデビル大蛇なんか可愛いもんだ」
「ん？龍の相棒って確か・・・ジャコウって名前だっけ？」
「ああそうだ」
「そういえばどんな奴なんだい？」
「気になる？」
「「「気になる（なります）」」」
「じゃあ教えてあげるよ俺の相棒は・・・」
「「「相棒は？」」」
「デーモンデビル大蛇」
「「「・・・・・」」」

あり？なんか拙い事言った？

「「「なにぃ～～！！！！？？？」」」
「うわぁ！なんだよ！大声出して！」
「出すに決まってんだろ！」
「デーモンデビル大蛇と言えば！デビル大蛇の亜種でデビル大蛇により強いって言う奴で伝説の魔獣と謳われるほどの奴じゃないか！！」
「ココ！エンペラークロウを相棒にしてるお前に言われたくね～よ！」

そんなやり取りがあり俺達は洞窟に向かった

ノッキングマスターとの再会（前書き）

久しぶりの投稿です

ノッキングマスターとの再会

俺達はフグ鯨の産卵場所である洞窟に向かっている
そしてなぜかグルメＴＶのティナいた
ココを撮ろうとしたらココは拒否した
やっぱりな・・・毒の事を俺に相談してきたりしたからな

「なんか・・・不穏な空気が・・・」

小松君が洞窟の周りに居る武器などを持った人たちを見て言葉を漏らす

「美食屋が捕獲したフグ鯨を横取りしようという連中だろう」
「洞窟から戻ってこれても危険なんですね・・・」
「大丈夫だよ俺が居るし♪」
「ほぼ全員に死相が見える・・・」

そんなこんなで洞窟の入り口に到着
深く真っ暗だ・・・
まあ俺の目もココと同じだからはっきり見えるけどね

「ひぃ～！！！やっぱり恐い～！！！」
「（この洞窟に居る何かに命を取られるというのか？）」
「さぁ～て出発するとすっか」
「おう」
「はい！」
「幻の魚フグ鯨・・・」
「あん？」
「え？」

いきなりティナが声を上げる

「どんな食材か知りたい・・・あたしが知りたいんだから世界のみんなが知りたいはずよ」

いや・・・なんでそうなる？可笑しくね？

「この私がフグ鯨の美味しいニュースを教えてあげるの！」

「そう言われてもだね・・・」

「ついてなら勝手にすればいい、思い立ったが吉日・・・その日以降は全て凶日だぜ」

結局ティナも付いてきて俺達は洞窟の中に進んでいった

「あ！ポキポキキノコだぁ！！」

「マジでか！」

小松君とトリコはポキポキキノコが生えているほうに駆けていったトリコはキノコを食べ始める

「お～！！このポキポキの歯ごたえ・・・くぅ～！！最高だぜぇ～～！！」

「ココさ～ん！龍さ～ん！ここいっぱい生えてますよ～！！」

「だから離れるなって・・・」

「ははは・・・小松君はコックの血が騒ぐのか食材を見るとついそっちに意識が行っちゃうのさ」

この後確か・・・死霊のはらわた・・・だっけ？が巨大ヤスデから逃げていった

ティナは死霊のはらわたがフグ鯨を捕獲したという嘘に騙されて見せてもらおうと一緒に洞窟から出ていた
俺達はスルーして進む事にした
ココを先頭に進んでいく
所々エメラルドのような水晶が顔を覗かせている

「随分狭くなってきましたね・・・」
「ああでも間違いね～よ・・・」

トリコはすぅ～っと鼻から息を吸い込む

「僅かだが潮の香りがする」
「相変わらず凄い鼻ですね、それにしてココさん明かりもなしによく進めますね」
「ココにはな人間には見えない赤外線から弱い紫外線全部見えちまうらしい」
「ええ！？」
「目には光を受け取る細胞、視細胞があってね僕の視細胞は通常の数百倍この暗闇でも昼間のように明るく見えるだ」
「それだけじゃねぇココの目は普通の人間には見えない電磁波まで捉える」
「ああまあね僕の占いはその人から出る電磁波の色や形、量を見てその人の将来を占うんだ」
「じゃあ僕の未来も見てください！」

小松は後ろ向きで歩き出す

「一流の料理人になれますよね！？どうですかココさん！？」
「「（（光が更に微弱に？））待て！止まれ！」」

その時には遅く小松君は崖になっている部分から落ちそうになったがトリコが間一髪手を掴み落ちずに済んだ

「なにしてんだよ？」
「すみません・・・」

カサカサ・・・

「何か音がするんですけど・・・」

小松君が下を見ると俺も大嫌いなサソリゴキブリがうじゃうじゃ出てきた

サソリゴキブリ　さそりごきぶり

猛毒を持つ凶暴な巨大ゴキブリ
背中に特徴的な模様がある
巣に落ちてきた獲物を集団で襲い、瞬く間に食いつくし、骨だけにしてしまう

生息地：暗くてジメジメした洞窟
体長：２．５メートル～３メートル
体高：１．５メートル
体重：２５０ｋｇ～２８０ｋｇ
価格：食用としての価値はゼロ。ただし一部のゲテモノ好きの間では高額で取引される

猛毒を持つ巨大なゴキブリ
見た目のグロテスクさに加え、繁殖能力が高く、群れで行動するため、集団だとさらにキモさが倍増

ＩＧＯが毎年公表する「捕獲したくない生物ランキング」では「危険だからイヤ！」というよりは「キモいからイヤ！」という理由で常に上位にランクインするぐらいの嫌われっぷりである

捕獲レベル：７
分類：昆虫獣類

この後はココが先に降り毒を使いゴキブリを追い返しココが自分の事を詳しく話し穴を降りた
そして何かが接近するのを感じた
そしたら向こうからアゲハコウモリの群れが来た

「アゲハコウモリの群れだ！」

アゲハコウモリ

アゲハ蝶のような模様の羽をもつコウモリ
暗闇の中を無音で飛ぶ為、洞窟内で襲われると厄介な存在
生食可能？

生息地：暗くて静かな場所
体長：７０ｃｍ
体高：－
体重：１ｋｇ
価格：１匹／１万５千円

アゲハ蝶のような模様の羽を持つコウモリ
集団で群れをなして行動し、臆病な性格のため、食べ物を捕獲する以外には滅多に外部の生物には危害を加えない
食用としては身の部分よりも、羽に付着しているリンプンが香辛料

として使用され
そのスパイシーな味のリンプンは「アゲハコウモリスパイス」として、数多くの料理人たちの必需品として活躍している

捕獲レベル：2
分類：哺乳獣類

「僕がやる小松君下がって」
「あっは、はい」

ココは右手を出し毒を染み出させる
それをアゲハコウモリに向かって飛ばす

「ポイズンドレッシング！！」

ポイズンドレッシング

指先から滴らせた毒液を、手首のスナップで飛ばし、広範囲の相手に攻撃を浴びせる技
毒を浴びアゲハコウモリは墜ちていく

「毒は抑えた直ぐに飛べるようになる」
「臆病で滅多に襲う事のない奴らがどうして？」
「ああ襲うというより何かから逃げていく感じ・・・ハッ小松君は！？」

周りを確認するが小松君は居ない

「小松！？小松！！」
「小松君！！」

うねうね・・・

「！！！」

この感覚・・・

「ココ！トリコ！何か来るぞ！！」

「「え！？」」

「ギオ゛ア゛ア゛オ゛ギャア゛ア゛！！！」

俺達の目の前に現れたのはデビル大蛇だった

「ち！面倒なのに会っちまったぜ！」

「龍！トリコ！奴の相手は僕がする、その間に小松君を！」

「ココ！コイツ相手にさすが一人じゃ無理だ俺も残るぜ！龍！小松を頼むぜ！」

「任せろ！！」

俺はデビル大蛇をココとトリコに任せ小松君を探しに行った

デビル大蛇は俺を追おうとするが

「おっと！僕の大親友に手は出させないよ！」

「テメェの相手は俺達だ！」

ココとトリコが抑えてくれた

よっし探すか！！

でも急がないと！ここは迷路だ早くしないと小松の命が危ない！

くっそ！どこだ！？

探していると・・・

ドカ～ン！！！！！！！
とんでもない爆音が響く！
「おわぁ！耳が！耳がぁ～！！！ってやってる場合じゃないこっちか！！！」
俺は走り出した
着いた所ではデーモンデビル大蛇が居た
くっそ！俺が蘇生するしかないか！
「ほう！今の爆音に動じないとは流石じゃなあ」
って！あの白リーゼント！まさか！
その老人は肩にノッキングをし巨大化しあっという間にデーモンデビル大蛇をノッキングし
小松君を蘇生した
「もう大丈夫」
「って！先生！なにやってんすか！？」
俺は次郎に話しかけた
「なんじゃ？おう！龍じゃないか！元気だったか？」
「まあご覧の通りですってか何やってるんですか？」
「十年に一度のフグ鯨じゃぞ？」
「ああ鰭酒目当てですか」
そんなやり取りをしていると小松君が起きた
「おう起きたか二度の人生噛み締めて生きるといい」

先生を見て小松君は驚く

「ああ～！！！でかい爺の化け物～！！」

と言って逃げ出す

「化け物だと！命の恩人だぞぅ！？」

「え？命の？はっそう言えば僕はあの時・・・」

「じゃあ気をつけてなぅぃっく」

先生は去っていく

「あ、あのう！」

「あっそうだ洞窟の砂浜に得体の知れないものが近づいてきとるから

フグ鯨を捕まえたら早く帰ったほうがええぞぉッじゃな龍」

先生は去っていった

その後小松君は俺に泣き付いてきた

「っていうか龍さんあの人、龍さんの知り合いなんですか？」

「ああ俺のノッキングの先生だ」

フグ鯨　実食の時！

先生と別れた後にトリコ達と合流し洞窟を進んだ

「小松、お前は命を助けられた恩を忘れちゃいけね～何時か爺さんを最高の料理で迎えてやんな」

「はい！じゃあトリコさんその時は食材調達お願いしますね！？」

「おい見ろ！」

トリコは明かりが見えたら走り出した

俺達も追いかけていくとそこは洞窟の中とは思えないほどの明るさだった

所々から水晶が飛び出し美しい光景が広がっていた

「さあ捕獲するぜ！深海の珍味！」

トリコは上着を脱ぎ飛び込んだ

「ああ！待ってくれよ！」

俺もあわててノッキングガンを持ち飛び込んだ

しかも驚いた

とんでもなく水が澄んでいる

これが本当に海か？

真水並みに澄んでいる

あ！トリコが指でノッキングした！

俺も行くぜ！

「消命・・・」

気配を消してフグ鯨に近づきエラから頭部の中心へ、斜め４５度の角度で

「ノッキング・・・」

ノッキングガンの先端がフグ鯨の中に入りフグ鯨を麻痺させる

よし！師匠のお土産用と優奈のにもね♪

「あれ？龍さんは？」

「まだ上がってないのかい？」

「ぷはぁ！」

「お！上がってきたな！そっちはどうだった？」

「なんとか7匹だ」

「7匹か！俺達の勝ちだな♪」

「いつの間に勝負になってたんだ？」

俺は水から上がり4匹を残し3匹を捌く

小松君も捌き始め失敗続きだったが最後の一匹で成功

「おい！龍！見ろよ！小松の奴やったぜ！」

トリコがこちらを見る

俺はなんとか3匹捌くことができた

「ぬお！3匹捌いたのかよ！？」

「ああ1人1匹ずつな♪」

「本当ですかぁ！！？」

「ああ今回小松君ががんばったからね」

「有難う御座います！」

「それにしても・・・3匹捌いちゃうなんて・・・」
「まあ・・・疲れがなかったからかな？」

そしてフグ鯨を刺身にした

「この全て食材に感謝をこめて！」
「「「「いただきます！」」」」
「では早速刺身を！」

トリコはいっきに箸で刺身を取る

「お～！！」
「あぁ～！ちょっと取りすぎですよ！」
「まあ僕達も食べよう」

俺達もフグ鯨を口に入れる

「甘い！なんて脂の旨みだ！最高級のミミック鯨の霜降り肉とマグロの大トロが合わさったみて～だ！
うめぇ～！噛んでも？んでも味が出続ける！噛み過ぎて顎がいてぇ～でもやめらんね～」

ゴクッ
飲み込んだ瞬間身体の疲れが吹っ飛んだ

「おお！疲れが一気に吹っ飛んだ！滋養強壮の効果があるとは聞くがこれほどとは！」
「トリコさ～ん！鰭酒できました～！」
「ああ！」

ズズッ

「うめぇ～なんて美味い鰭酒だ・・・香ばしさが全身を突き抜ける・・・

辛口の熱燗で旨みが増して全身の細胞に染み渡る・・・」

「ココどうだった？」

「久しく忘れていたよこの感動・・・美食屋か・・・また初めてみるかな」

「「「「ご馳走様でした」」」」

「さぁてかえろうか？」

バチャン

水音立てて現れたのは黒い毛をしアリクイに似た頭部をした人型の物体

スタージュンのＧＴロボだ

ココは致死性の超猛毒をだし

トリコも戦闘態勢

「・・・目的は達ったろさっさと帰れ・・・」

俺は低い声で言う

ＧＴロボは頭をかきフグ鯨の網を持って帰っていった

「龍・・・あれはいったい・・・」

「・・・おそらくＧＴロボだろうそれより早くここを出よう」

「ああ」

俺たちは荷物をまとめ洞窟を出た

俺は師匠のもとに出向き今回の事を話し第１ビオトープに向かった

トリコの怒り

俺は今トリコと小松君と一緒にヘリに乗り第1ビオトープに向かっている
トリコと俺はハンバーガーを作っている

「デビル大蛇のハンバーグにネオトマト、ミネラルチーズを挟んだ名づけてトリコバーガー！」
「そのトリコバーガーの照り焼き版名づけて照り焼きトリコバーガー！」
「でかすぎですよ！っていうかそのまんま！」
「「この世の全ての食材に感謝をこめていただきまぁ～すぅ！」」
ゴキィ
「顎を外して食べた！！」
「うん癖はあるが弾力はあるこの肉の歯ごたえ清々しいネオトマトの風味
まろやかのミネラルチーズが心地いい味の三重奏を奏でてやがる」
「甘みを帯びしっとりとまろやかになったこの肉この照り焼きソースのかかったトマトやチーズも更に味が深く濃厚になっている」

ゴックン

「「うめ～！！」」
「そういえばフグ鯨いかがでしたか？」

ヨハネスが聞く

「インパクトはあったが見送りだな海にはまだ食った事ねぇ～食材がおおい

フルコースの魚料理はそう簡単に決まりそうにね～よ」
「なるほどしかし今回ＩＧＯ捕獲を依頼した生物は」
「リーガルマンモス　その体内のどこかには上質な肩肉　ヒレ肉
モツ　サーロイン
それらの全ての美味さを持つ肉　ジュエルミートがあるという」

リーガルマンモス

第１ビオトープ、リーガル島のリーガル高原に棲息する、６本の足、２本の鼻と牙、一対の羽をもつ、虎毛模様の超巨大マンモス
捕獲アベレージ２７という猛獣達が住まうリーガル島の生態系の頂点に君臨し、高原を悠然と闊歩する
その驚異的な肺活量を以って、周囲にいる猛獣達を鼻から吸い込み、そのまま咀嚼して
骨のみを再び鼻から吐き出す食事風景は圧倒的。
リーガルマンモスにのみ存在する特殊な部位“宝石の肉（ジュエルミート）”により、
「古代の食宝」と呼ばれている
正確な技術をもってすれば体内の宝石の肉を取り出されてもマンモスが死ぬことはなく
マンモスが生きている限り、宝石の肉は再生するという
成長して巨大になるにつれ捕獲レベルが高くなる。
鳴き声は「バォオオオオ」

＞引用＜
「古代の食宝」と呼ばれる巨大なマンモス
成長が早く、産まれてから数週間で体長５０メートルにもなる
（産まれた時は約１０メートル）
繁殖力は強くないが、その分長寿で、５００年以上生き続け、その間も成長は止まらない

「鼻」
左の鼻で吸い、右の鼻で吐き出す。主に栄養分のみを吸収するため骨などを溶かす程の強い消化能力はない
鼻は全て硬い筋肉で、食べると牛やブタの舌のような食感がある

「肉」
ほとんどの旨みを“宝石の肉（ジュエルミート）”に取られてはいるが、それでも十分に旨い

「羽」
大昔は空を飛んだというウワサもあるが、今ではほぼ必要のないものである。味は鳥皮に近く、けっこう美味

「胃」
全部で１２個ある胃でほとんどの物を消化
体内は広いため、空気も通っている。生物も棲んでいて、独自の生態系も確立しているとか

宝石の肉（ジュエルミート）
個体により場所が違うため見つけ出すのは至難。小売で１００ｇ５００万円。

トリコ達が体内に入ったマンモスは捕獲レベル：４８
年齢は約４００歳

リーガル（地名）＋マンモス
捕獲レベル：ＮＯ
分類：哺乳獣類

俺達が乗ったヘリは第1ビオトープに到着し地下に向かうエレベーターに乗った

「所長さんってどんな人なんですか？」

「唯の酒飲み親父だ、まあ会長、副会長についでナンバー3と言われてるみたいだけどな」

「ナ、ナンバー3って緊張しますね・・・」

「緊張感は持っとけ何が襲ってくるか解らないからな」

そしてエレベーターの扉が開き様々な猛獣が見えてきた

「これって・・・？」

「絶滅種のクローンや動物同士の混合種チェインアニマルだ、束縛された動物

グルメ研究と言う大儀をかざしているが倫理的な観点からトップシークレットの場所」

「・・・」

「龍・・・大丈夫か？」

「ああ・・・やっぱり胸糞悪いぜ・・・命を弄ぶみたいで・・・」

俺は無意識に殺気を出していた

それに寝床から出ていたマッスルクラブも戻っていた

「お～う！久しいなトリコ！龍！」

奥から現れたのは酒を片手に持った男だ

「もう飲んでるか？マンサム所長？」

「今ハンサムって言った？」

「言ってね～よ！」

「この人が所長さんですか！？ッてお酒クサ！」
俺達はグルメコロシアムに入り席に座った
猛獣達が次々に入ってきてついにバトルウルフが来た
・・・久しぶりに見たな・・・バトルウルフ・・・
あいつ元気かな？
そんな考えに浸っているとトリコが乱入し5連釘パンチで
特殊超硬化アクリル板を破壊し新たなバトルウルフ誕生の記念の花火とした
そしてバトルウルフがデーモンデビル大蛇を倒した
だがバトルウルフをGTロボがビームで打ち抜いた
俺はすぐさまGTロボに近づいた

「おい・・・」
「アン？オマエハ！ジャリュウハオウ！リュウト！」

蛇龍覇王というのは俺の二つ名だ
蛇はジャコウから
龍は俺の名前からだ
覇王は何故か付いた

「・・・殺す必要があったのか・・・ベイ・・・」
「アン？マズソウダカラコロシタダケダ」
「・・・」

右手にリボンビング・バンカーを展開する

「うるらぁ！！！」

GTロボの腹にぶち込む

「ゴボォ！」

ＧＴロボをコロシアムの方に吹き飛ばす

「龍！！こいつは俺が駆除する！！！！！」

トリコの周りには殺気にも似たオーラが出ている

「まかせるぜ」

この後いきなり５連釘パンチを放ちＧＴロボを粉々に粉砕した

俺との修行もあってトリコは原作よりパワーアップしているようだな

サニー登場

俺達はコロシアムの一件のあとマンサム所長のフルコースをご馳走になったはいいが
リーガルマンモスの事をすっかり忘れていたがサニーが捕獲完了したという事だ
今は外で待っている
がぶりゅ
トリコは酒乱牛にかぶり付いた

「うめぇ～！酒乱牛！肉汁とテキーラの味が口いっぱいに広がって味に酔うとはまさにこのことだ」
「わしにも食わせろぉ！」
「渡すか酔っ払いめ！」
「外まで食事持ってこなくて・・・あっそうだトリコさん龍さんはどうしたんですか？」
「龍はなんかを呼んでくるって言ってたぞ」
「何かを？」
「あ！お兄ちゃん着たし！」
「「「え！？」」」

リンが向く方向を向くと巨大な物が見えた
6本の足、2本の鼻と牙、一対の羽、虎毛模様
それを片手で支えている一人の男
1歩1歩踏み出すたびに地面は凹んでいる
リーガルマンモスの体重が伺える

「で、でか！あれがリーガルマンモス！？」
「古代から食の宝　食宝と言われてきただけの事はあるな、圧倒的

なサイズだな」
「にしても・・・あのサイズは・・・」
すると近くの岩場から何か出てきた
「ギャングフットの群れだし！」
ギャングフット

凶暴で食欲旺盛なことで知られる猛獣で群れを作って行動する
時には、他者が捕えた獲物を横取りしようとすることも
頭部から尻尾にかけてタテガミが生え、あごひげを生やし、２足歩行する
鳴き声は「ハルルル」「ブルアアア」

生息地：リーガル島第１ビオトープ
体長：４メートル
体高：３．５メートル
体重：１・５トン
価格：食用としての価値は０

「リーガル島のギャング集団」の異名を持つ凶暴で食欲旺盛な爬虫獣類
群れで行動し、他の動物が狩った獲物を横取りして食べる。一匹一匹の捕獲レベルもさることながら
群れでの特性を活かした狡猾な集団攻撃はタチが悪く、手ごわい猛獣である

捕獲レベル：１５
分類：爬虫獣類

ギャングフットはリーガルマンモスを奪おうと襲い掛かるが

「ウゴォ！？」

「バァ！？」

ドサササ・・・

ギャングフットはノッキングされたように倒れ眠りはじめた

「ノッキング！？」

サニーは近くまで来たらリーガルマンモスを此方にパスしてきた

「「「「えぇ！？うわぁ～！！！」」」」

トリコ達は避難　マンサムはリーガルマンモスを受け止める

「あっごめちょっと重かった？でもナイスキャッチ所長！でも美(つく)しさが足りないけど」

「「「え？」」」

「受け止める所作に胸がドキュ～ンってしないし全く感動が起きないって言うか

そもそも顔も不細工色気もないしもう消えろって感じかなぁ、全く龍だったらめっちゃ美しくできるのに・・・」

「ななんだこの人～！！！？？」

「コラァ～！サニー！！大切な食宝をぶん投げるなぁ！！」

「マジで美しくねぇ」

サニーは超能力を使っているかのようにふわりと浮き上がりトリコ達の近くに来た

「やあ久しぶりだなトリコ以前より細胞が活性化している肌の弾力

性も高いいいもの食べてる証拠だな」
「いきなり肌触りまくるんじゃあね～よキモチワリィ」
「リン・・・お前！何だその土管みたいな足は！久しぶりに会ったら皮下脂肪もハンパねぇ！
そんな甘いもんばっか食べてるからだ！」

サニーとリンが喧嘩を始めようとしたタイミングで

「ギオ〝ア〝ア〝オ〝ギャア〝ア〝！！！！！！！」
「「「「！！？？」」」」

トリコ達が雄たけびが聞こえた方向を見たら
通常よりでかいデーモンデビル大蛇がこちらに向かっていた

「でぇ～！！！！」
「おいおいリーガル島にはデビル大蛇もデーモンデビル大蛇もいないはずだろう？」
「お～いトリコわりぃ遅くなった」
「龍さん！？」
「ん？どうした小松君？」
「嫌だって何でデーモンデビル大蛇の頭の上に乗ってるですか！？」

俺はジャコウの頭の上に乗っている

「あれ？前言わなかったっけ？こいつは俺の相棒ジャコウだ」
「あ！ココさんの時にデーモンデビル大蛇が相棒だって言ってましたね」
「ギュル♪」
「久しぶりだな龍」
「おうサニー久しぶり」

「にして・・・ジャコウ・・・おま相変わらず肌がつるつるだな
普通のデーモンデビル大蛇はキモイがジャコウお前は美しい」
「ギュル♪」

ジャコウはサニーに何かを渡す

「お！これキューティクルベリーじゃん！サンキュ！ジャコウ」
「あのぉ～トリコさん龍さんって四天王の皆さんと親しいですか？」
「ああ龍は四天王になる前に一緒に修行もしたしな、得にサニーとココは龍を慕ってる」

炸裂！フライ返し！

俺達はリーガルマンモスの生息地である
リーガル高原に向かっている
ジャコウはテリーと早速仲良くなったようです
なんか通じる部分があるのかなぁ？
俺達は黒草の草原ブラックカーペットに到着した

「おお！黒草の草原ブラックカーペットじゃね～か！」
「サラダにしたら最高だろ～なぁ～」

黒草（くろぐさ）

様々な草食獣が好んで食べる草で、その草原は「ブラックカーペット」と呼ばれる
シャクシャクとした歯ごたえで、サラダとしても人気が高い食材
そのまま食べても美味しいがココアマヨネーズをつけて食べると絶品

生息地：温暖で栄養豊富な大地
体長：約３０ｃｍ
体高：―
体重：―
価格：５０本１束／１２００円

イラクサ科の多年草
その色味からは苦そうなイメージだが、味そのものは、フレッシュな口あたり
食感はニラや青ネギに似たシャキシャキとした歯ごたえ
また、群生する黒草はブラックカーペットと呼ばれ、周辺に生息す

る草食動物たちの貴重な栄養源となる

捕獲レベル：１以下

分類：植物

ジャコウは早速好物である黒草を食べ始める

トリコもリンが見つけたココマヨの樹でココアマヨネーズを

黒草にかけ食べる

ココアマヨネーズ

ココマヨの樹からとれるマヨネーズ暗くて静かな場所

黒草につけて食べると絶品

生息地：温暖で栄養豊富な大地

体長：—

体高：—

体重：—

価格：スーパーなどで１本５００ｇ／２５００円

ココマヨの樹はウルシ科の落葉高木

その熟した実には、脂分が豊富に蓄えられており

ココアの苦みとマヨネーズの酸味が混ざったような味のココアマヨネーズが入っている

生野菜などのサッパリした食材のドレッシングとしてはもとより、

その癖になる味わいから

「ココマヨラー」まるココマヨ好きも多いとか

捕獲レベル：１以下

分類：天然食品

するとテリーが吠え始めた

「テリー？」

「！トリコ」

サニーが向いている方向を見ると

全身を硬い岩で覆われたかのような、巨大なヒト型の猛獣が近寄ってきた

「なんなんですか！あれぇ～！？」

「ロックドラム」

ロックドラム

全身を硬い岩で覆われたかのような、巨大なヒト型の猛獣

本来の生息地は海岸近くだが、その旺盛な食欲を満たす為、より大量のエサを求めて内陸部にも進出した

強固な甲殻（から）に覆われており、その肉は珍味とされているが……

サニーによると皮膚には独特の弾力があるものの、ほとんどが脂肪だという

その甲殻は、超硬タンパク質の表皮に美炭酸カルシウムが付着してできており、完美大理石の原料となる

鳴き声は「ヴロロ」「ゴァァァ」「ヴォオオ」「ゴロロロ」

生息地：岩場の多い海岸から山まで幅広く生息

体長：—

体高：３５メートル

体重：５０トン

価格：肉は１ｋｇ／２万円　殻の岩は１００ｋｇ／６００万円前後で取引される

もともと海岸近くに生息していたが、あまりの大食漢故に大量の食料を求めて陸地の奥に進出した好戦的な巨大甲殻獣類
食用としても用いられるが、全身を覆う硬い甲殻は超硬タンパク質の表皮に美炭酸カルシウムが付着した素材で
加工すると世界一硬くて美しい大理石と言われる「完美大理石」の原料となる
そのため肉よりも甲殻の方が何倍も高値で取引されている
その高額の甲殻を求めてロックドラムの捕獲に挑む美食屋たちは後を絶たないが
そのほとんどがロックドラムのパワーの前に返り討ちにあっているらしい。

捕獲レベル：２７
分類：巨大甲殻獣類

「小松お前は下がってろ龍、小松を頼む、サニー援護してくれ」
「ヤダ」
「っておい！！」

思わず突っ込むトリコ

「めんどくせぇ」
「面倒ってそんな事言ってる場合じゃないし」
「所詮食うためなら手段を選ばん生物（せーぶつ）生き方に美しさぜんぜんなくね？
見た目もあれだし相手する要素０」
「だが肉は珍味倒す価値１００だろ！？」

「栄養豊富なの？ないなら価値ゼロォ～」
「なら間を取って５０だ！そうだ！龍！ジャコウは！？」
「そうだな相手でかいしジャコウ頼めるか？」

ジャコウは一心不乱に黒草を食べている

「・・・わりい食う事に夢中になってる・・・」
「トリコさん！きてますぅ！！」

小松君の声でロックドラムの攻撃に気付き後ろに飛びのく

「うぉぉぉ！！５連！釘パンチィ！！」

ロックドラムの左手に釘パンチが炸裂し手に大きな穴を開け
ロックドラムは倒れる

「くっ・・・コロシアムでの無理が響いてるぜこれ以上の連射はきつい
左手じゃＧＴロボとの戦いでつかねぇ～しサニーが動いてくれれば・・・」

トリコの隙を付きロックドラムは踏み潰そうとするがテリーが素早く反応し
ロックドラムに攻撃を加えて倒す
それを見てテリーに笑顔を向けて喜ぶトリコ
だがテリーに嫉妬しリンが倒れたロックドラムにスーラーリラクデーションを吹き付けようとするが
誤ってバトルフレブランスを掛けてしまい興奮状態にしてしまう
リンにひたすら攻撃を食われる
そんな時俺はロックドラムの殻の価値を思い出した

「サニーほら」
「？っん！！？」

サニーは何かに気付き邪魔だったロックドラムをフライ返しで吹き飛ばす

「こいつは完璧なる美の石！完美大理石の材料になる！」
「妹より石目当て・・・信じらんないし・・・」
「ははは・・・」
「素材としては何十円としないパスタだが
料理人の手にかかり美しい皿に盛り付けられる事により
数千円になるそう皿は食を引き立てる大切なサポーター！
手を加え美しい皿に盛り付けられる事でパスタの味のランクは上がる！
それは気のせいでもない！いわば合作！美しさとは調和なんだよ！
つまり食材のみを求めるなんてナンセンス！全く持ってぇ下劣の極みぃ！
フン・・・解ったかぁ龍以外のお前らぁ！？」
「って僕達のこと言ってたのぉ！？」
「さあこれもまた巡り合い共に調和しようかロックドラム？」

ロックドラムはパンチをするが

「美しく散るがいい！フライ返し！」

ロックドラムはまるで自分のパンチを喰らったかのように吹き飛ぶ

「どお？てめぇ～パンチ食らった気分は？」

フライ返し

カウンター技
あらゆる物理攻撃は、同じ力で返される
ただし触覚で力を流動させ、相手に返す技であるため、触覚の耐久力を超える力を跳ね返すことはできない
グルメ１５３時点、サニーの触覚１本あたりの張力は約３００？であり
１本でその１０００倍までの力を受け流すことが可能。つまり１本で最大３００トン
触覚３０万本をフルに使っても返せる力は９０００万トンが限界値

その後もフライ返し、髪(ヘア)ネット、髪(ヘア)ロックを使い
ロックドラムを倒した

「さっすがサニー♪ってジャコウまだ食ってるのか・・・」

あの戦いの中ずっとジャコウは黒草を食べ続けていた

キャラ紹介

龍神龍人（たつがみりゅうと）

性別　男

年齢　転生前　１８歳→　転生後　１８歳→　グルメ界での修行終了時　２５歳

身長　転生前　１８５ｃｍ　グルメ界での修行終了時　２１８ｃｍ
（グルメ界の食材が栄養が豊富だったため）

体重　転生前　６９ｋｇ　グルメ界での修行終了時　９８ｋｇ　四天王の三人より軽い

容姿　上の上　性格が優しいためとてもモテた
だが男子生徒からは嫉妬の目で見られていた
服装は黒い長ズボン、腕や脇腹の部分に赤と黒の龍が描かれている服を愛用している

前世では犯人追跡中のパトカーに轢かれ死亡
神の手によってトリコの世界に転生する
美食屋でもありＩＧＯ会長一龍の弟子
二つ名は蛇龍覇王
蛇は相棒であるデーモンデビル大蛇のジャコウから
龍は龍人の名前から
覇王は何故か付いた
四天王であるトリコ、ココ、サニー、ゼブラとは友人関係
ゼブラとは喧嘩仲間であり親友

ココに占いを進めた人物でもある、ココとは大親友
サニーとは美しさを語り合う親友
トリコとは頻繁に狩に出たり食い比べをしたりする大親友
武器はスパロボのソウルゲインの腕
二代目研ぎ師メルクに作ってもらった日本刀と斬艦刀
龍人は二刀流であるが斬艦刀は滅多に使用しない
主に二代目メルクに作ってもらった刀『黒刀　覇鎧龍』を使用している
黒刀　覇鎧龍には竜王デロウスの牙の一部が使われている
因みに二代目メルクに一方的に好意を寄せられている
ノッキングマスター次郎の下でノッキング技術を学び
ノッキングができないユニコーンケルベロスのノッキングに成功するなど
規格外すぎる人物

龍神優奈（たつがみ ゆうな）

性別　女

年齢　転生前　１１歳　→　転生後　１３歳　→　グルメ界での修行終了時　１８歳　→　現在　２０歳

身長　転生前　１４９ｃｍ　グルメ界での修行終了時　１９４ｃｍ
（グルメ界の食材が栄養が豊富だったため）

体重　転生前　３２ｋｇ　グルメ界での修行終了時　７８ｋｇ

容姿　リリカルなのはのフェイト

兄である龍人が死に絶望している中、神に出会い自らもトリコの世

界に向かう
自らも能力を貰いグルメ界で5年間修行し人間界に戻り美食屋になり龍人の情報を集める
2年後にグルメフォーチュンの近くの草原に寝そべっている龍人と再会する
重度のブラコンであり兄である龍人に恋心を抱く
トリコの世界には自分達を兄弟と証明する証拠がないため結婚しても問題ないと考えている
二つ名は女神（ヴィーナス）
華麗に美しく戦う事からつけられた
武器は愛用しているリボンと小型のノッキングライフル
中、遠戦闘を得意とする
美食屋と言っても調理の腕は凄まじく一龍も認める腕前を誇る
大人しくて少し茶目っ気があるが嘘をつかれるのが嫌い
そのためかゼブラと仲がいい
サニーには美容のいろはを教えてもらったり
ココにはよく占ってもらっている
トリコとは龍人と共に狩に行く
現在は癒しの国ライフで自分の身体に磨きをかけている真っ最中

ロックドラムに飛ばされて

さて俺は愛刀である『黒刀　覇鎧龍』を使いロックドラムの甲殻を剥いでいる
だけどこいつは軽く振るだけで山どころか海まで割るから優しくやらなければならない
スッ・・・ポロ
甲殻がきれいに取れた

「ふう・・こんなでいいか？サニー？」
「サンキュ龍」
「おいサニー本当に肉いらね～のか？」
「そんな栄養なさそうな肉いらね」
「まあサニーらしいな「ドスンドスンドスン！！！」ん？」

大きな音がしたのでそちらを見るとロックドラムが此方に向かって来ていた

「え～！？ロ、ロックドラム！？」
「サニーが初っ端に吹っ飛ばしたの戻ってきやがった！」
「あああれか」
「あ！バトフレ浴びせた奴！？ッてかぜんぜん元気だし！」
「ノッキングすんの忘れてた」
「「「ええっ！？」」」
「ははははは！！！」

俺達はロックドラムに蹴られて別々の方向にふっ飛ばされた
俺と小松君とサニーとジャコウ
トリコとリン

ってかよくジャコウふっ飛ばしたな

「わぁぁぁぁ！！？？」

え～俺達は簡単に言うと落下中です
今のは小松君の声です
う～ん後数十メートルですな

「髪ネット！！」

サニーが受け止めてくれました

「わりぃなサニー」
「細か事気にすんなってかロックドラムさすが捕獲レベル２７
甘く見ていたまさかマッシュルームウッドまで飛ばされるとは」
「ああまさか油断してたはいえジャコウを吹っ飛ばすとは」
「うわぁ～クリーム松茸だ！」
「「ってか復活早！」」

クリーム松茸
リーガル島のマッシュルームウッドに生える天然のクリーム松茸は、
甘みが全然違う
軽く割いてから焼くと独特の香りがしてクセになる味わい
薄くスライスして刺身で食べるとクセがなく、いくらでも食べられる
コリコリ、ポリポリと歯ごたえのあるキノコ

＞引用＜
生息地：多湿な場所（リーガル島・第１ビオトープ「マッシュルームウッド」など）
体長：２５ｃｍ

体高：—
重さ：１本／７００ｇ
価格：１本／８万５千円

松茸独特の香りに加えて、ミルクを思わせるようなクリーミーな味わいの担子菌類キジメジ科のキノコ
そのまま食べても甘みがあって美味しいが、軽く焼いて醤油などをかけて食べても香ばしさが増して味わい深い

「いや～天然物のクリーム松茸なんて初めて見ましたよ！
サニーさん！龍さん！はっ！これは！」

小松君はなにやら草むらに手を突っ込むとタコが出てきた

「うわぁ！キモ！」
「ギュルルルル！！！！！」

サニーとジャコウは思わず引く

「酢ダコですよ樹海を渡り歩く調味料ダコ、オクパソースの一種ビネダーソース出す酢だこ！」
「美しさマイナス１００、キモさ５万！！」
「はっ！」

小松君は更にタコを見つけ両手、頭、肩に乗せてる

「お～う！！！」
「ギュルルルルルルルル！！！！！！！！！」
「ウスターソース出すウスタコにサルサソース出すサルスタコ！
クリーム松茸に合いそうな醤油ダコもいますよ！」

「な、なんでよりにもよってこいつもいるんだ・・・」

因みジャコウがオクパソースから逃げているのは
以前にこいつを食べて腹を壊したからである
それからジャコウはタコが大の苦手になってしまったのだ

ＧＴロボＶＳ蛇龍覇王

俺は今怒りを感じている
セドルが行った残虐な猛獣殺し
俺はトリコと同じで基本的には食うため以外では殺さない
セドルの行ったことは許せない
だがあいつの事はサニーに任せよう
さて今はリーガルウォールを登ってます
サニーの能力って本当便利だよね
俺も触覚使って上ってます
まあ俺の場合髪はそんなに長くないんで１０万本なんだけどね
因みジャコウは下で待ってます

「ん？」
「どした？龍？」
「お出ましだぜ　リーガルウォールの主　ヘビークリフ」

ヘビークリフ

リーガルウォールの主
断崖絶壁に横穴を掘って棲みついている
何もしなければ襲ってこないが、怒らせると非常に厄介な相手

捕獲レベル：３０
分類：哺乳獣類

「小松君静かにね」
「ハ、ハイィィ」

だがいきなり空が暗くなってきた

「そ、空が暗くなってきましたね・・・雨雲でしょう～か・・・？」
「いや・・・これは・・・！」
「な！」
「なんじゃ～こりゃ～！！？？」

落ちてきたのは三ーが捕獲した子マンモスより更に巨大なマンモス

「親マンモスだぁ！！」
「サニーさん！子マンモスの時みたいに持ち上げてください！」
「できるか！ってか無理だ！龍！如何にか出来ないか！？」
「幾らなんで足場が不安定すぎる！こんなでどうにかし様なんて無理だ！」

そんな中へビークリフが出てきた

「あれ？」
「なんか怒ってね？こいつら？」
「ええ～！？怒らせたらヤバイじゃないですか！？」
「なあサニーこいつらこの騒ぎ俺達のせいだと思ってね？」

野生のへビークリフが襲い掛かってきた！

「思ってる展開じゃね～かこれ！！」
「やばい！ここはいったん回避するぞ！！」

俺たちは触覚を使って逃げる

「逃げましょうサニーさん！龍さん！ぬほほ～に～げ～て～！！」

「「逃げる？フライ返し！！」」

襲い掛かってきたヘビークリフをフライ返しで返り討ちにする

「「逃げるなんてブサイクな事はしねぇ～ね一旦引くだけさ」」

でもまだまだヘビークリフいっぱい♪

「「かも～す！！ＭＡＸで引くけどなぁぁ！！！くおぉぉぉぉぉ！！！！！！！！」」

崖を全力疾走！！！

だけどトリコがナイフで穴を作った

「よぉし！行くぞ小松（まつ）！龍！」

「ＯＫってかはやくいくぞぉぉぉ！！！」

触覚で崖をはじき穴へと飛び込み

「「髪ネット！！！！」」

ネットを張りなんとか穴を潰されずにすんだ

「ふぅ～って！ヘビークリフ来たぁ！！」

そしてココが救援に来てくれ何とか助かった

「ココサンキュ」

「礼ならいいよっていうかなんで体内に行かなかったの？」

「あん？巨大ＧＴロボが２機いんのに俺が居ないでどうする気だよ

？」

トリコ達は既にマンモスの中に向かった
それに原作とは違い巨大型が2体居やがる
ピンクに赤

「俺は赤を相手する・・・ジャコウォォ！！」
「ギオ゛ア゛ア゛オ゛ギャア゛ア゛ア゛！！！！！！」

ジャコウがGTロボの足に巻きつき思いっきり投げ飛ばす

「ココ・・・ここから離れて戦うほうが良いだろ？」
「ああすまない」
「行くぞ・・・覇王の・・・処刑の時間だ・・・」

大きく投げ飛ばされたGTロボのもとに向かう

「ウウ・・・ヤッパリイマノハジャリュウハオウノアイボウ
デーモンデビルオロチノシワザカ・・・」
「・・・対大型猛獣用の巨大型・・・覇王の・・・餌食にしてやるよ・・・」

俺は覇鎧龍を引き抜き刃の部位に付いていた血を舐める

「・・・ハオウットイウヨリ・・・チヲホッスルシニガミダナ・・・」
「死神か・・・それもまた・・・覇王の顔・・・」
「ピーラーショット！！」

GTロボの体毛に使われている強化アラミド繊維を高速で飛ばし攻

撃してくる

「・・・コーファルス・・・」

左腕で全てのピーラーショットを弾く

「！スデデピーラーショットヲ！？」

「・・・覇鎧龍・・・斬撃・・・」

斬撃を飛ばしＧＴロボを十字に切りつける

「・・・キリシパルス・・・」

「グォォ！」

「・・・装甲を抉っただけか・・・さすがに力をセーブしすぎたか・・・」

「アアン！！ナメテンノカ！セーブシタダト！？」

「力を出すとこの島を割っちまうからな」

「ウウ・・・ミキサーパンチ！！」

右腕が高速で回り殴ってくる

「こうやるんだよ・・・玄武剛弾！」

腕を高速回転させそのまま飛ばす

ミキサーと玄武剛弾がぶつかり合い大気が揺れる

「ヌォォォォ！！！バカナ！ジンタイデミキサーイジョウノコウソクカイテンスルダトォ！！」

「もう一撃！青龍鱗！」

手にエネルギーをため青龍鱗を放ち腹に直撃させる
それで体制を崩し玄武剛弾が顔に決まる

「チィィ！！！」
「・・・どうだ？覇王の攻撃の味は？」
「コンガキガァァァァ！！！！！！！！」

ダッシュで近づいてくる

「１，２，３，４，５，６，７，８，９，１０・・・」

左腕に力を溜める

「てめぇを原始レベルまで粉々にしてやるよ・・・
１０連釘パンチィィ！！！！！」

釘パンチを腹に命中させ１０回の衝撃が波状的なダメージが襲い
ボディを粉々にしココの目を上回る俺の目でも目視不可能なまでに
粉砕した
因みに俺の上限は８０連までだ
滅多に使わんがな

「・・・ココの所に行って飯分けて貰おう」

俺はココの居る地点に向けて歩き出した

ジュエルミート実食！

現在俺はココとサニーと一緒にキッスが持ってきてくれた
水や食料を食べています
俺も行こうと思ったんですけどサニーに美しくないっと言われて止められました
そしてマンモスが再び身体を起こし大声を上げる

「バォオオオ！！！」
「おお毒がついに切れた」
「トリコ達はどうなってる！リンは！？小松は！？」
「信じる事が美しいだろ？」
「そうだぜサニー本当お前は美しい奴だよ」
「バオォォォ！！！」

マンモスは口から何かを吐き出した

「サニー！クッション頼む！」
「おおトリコ！小松君！リンちゃん！」
「あれが・・・」
「ジュエルミート！！」

トリコが右手で持っているのは赤くまるで職人が作り上げたような美しい模様此処からでもにおいがする

「うっひょ～！！！最高に優しくキャッチしてやる！髪ネット！！」

キャッチしたは良いがトリコは地面に落ちた

「すげぇ・・・これがジュエルミート・・・」
「おまえなぁ！優しくキャッチするって肉の事かよ！？」
「ん？たりめぇだろ」
「ははは・・・」

この後小松君の言葉でリンちゃんに髪オペレーションで治療するとキッスが子マンモスを誘導して連れてきてくれた

「ありがとう古代の食宝よ・・・ん？」
「バオォォォ！！！」

トリコが礼を言ったらマンモスが足で踏み潰そうとしてきた

「「「「うわぁぁぁ！！！？？」」」」
「まだ怒ってる～！！」
「ジャコウ！テリーとオブサウルスを運んでくれ！いいよな龍！？」
「オフコース！」
「ギュルルル！」
「サニー！フライ返しだ！」
「此処は毒だろココ！」
「ははははは！」
「とにかく研究所に帰るぞ！」
「はい！」
「ジュエルミート実食だ～！！」

俺達は騒ぎながら逃げた

・・・そして鈴ちゃんが目覚めついに実食の時
ウエイターが皿を持ってきて蓋を開けた
そこにはまるで太陽の様に自ら光を放っている

「ジュエルミート盛りで御座います」
「きたぁ！」
「これが・・・ジュエルミート・・・」
「わお」
「月の光が霞んで見えるし！」
「あれだけ巨大なマンモスの体内をこいつが照らしてたんだあたりまえか」
「とにかく食べようぜ！」
「「「「「この世の全ての食材に感謝をこめていただきます！」」」」」
「はぁぁ・・・ま、眩しい・・・でも白熱灯のように優しい光だ」

小松君はナイフを入れた

「わぁ―――　肉汁花火が打ち上がった―――！！」

そして口に入れる

「スゴイ・・・　見た目はこんなにゴージャスなのに・・・
全く飾り気のない肉本来の旨みが口いっぱいに広がる・・・」

もぐ　コリ

「これは！！　心臓（ハツ）のようなコリコリとした歯ごたえ。
噛むごとに肉汁がどんどん出てくるけど全然しつこくないぞ」

そして飲み込む
すると全身が光を発した

「ス・・・スゴイ！！　全身が光り出した！！
まるで、細胞1つ1つが、喜びで輝いているみたい！！
すごいですね！トリコさん！！って超光ってる！！」
「んおっの部位は肝臓（レバー）だ！　レバ刺しの食感！！
でも、匂いやクセは全くない！　しっとりとクリーミーな味わいだ！！」
「ん――――　ここはバラ肉の濃厚な味！
お肉と脂の層が何重にも重なって、口の中でほどけるような食感。
最高かも、コレ！！」
「おっ、来たぞサーロインだ
口の中で一瞬で溶けたかなりの脂肪分だが、なめらかで、とても喉越しがいいな」
「おおこれは肩肉のしっかりとした歯ごたえ！噛み応えがあって
口いっぱいに広がるこのエキス！」
「味と食感！　そして部位の…カーニバルだな、まるで！！」
「こりゃあ・・・決まりだな・・・」
「今何つったトリコ？」
「んおっ！！サニーと龍！凄ェ輝きだな　お前ら！！」

俺とサニーはとんでもない輝きを放っていた

「なあトリコ・・今何つったんだよ？」
「なにが？」
「なんか決まりって言ってたな」
「ああこれだけの肉だ・・・入れてもいいかなと思ってよ」
「入れてもいいって何にだ？」
「俺のフルコースの肉料理にさ」
「わぁ～！トリコさん！！」
「賛成～！！」
「ちょ待て～い！！」

サニーが決まる時に寸止めした

「「「「なっ・・・！！？」」」」

「何すんだサニー　コラぁ！！」

「何すんだじゃねーだろ　トリコはやまっちゃいけねーぜ！！」

「はやまってねーよ　別に！！」

「てかオレのこの輝きを見ろ！！」

「ああ・・・うん・・・スゲェな・・・だから？」

「ジュエルミートは俺を選んだくさくね！！？」

「くさくねって・・・どーゆー意味？」

「まさか・・・お兄ちゃん・・・」

「『宝石の肉（ジュエルミート）』はオレのメインディッシュに決定する！！」

「待てコラ～っ！！」

「何すんだトリコてめぇコラぁ！！」

「うるせぇ何でお前のメインになんだよ！！」

「オレの方がピカピカしてっからだろが！！」

「ピカピカカンケーねーだろ！！」

「てかそもそもオレのお陰でジュエルミート捕れたっぽくね？俺が倒したGTロボ（ヤツ）強かったっぽいしな」

「なわけあるか！お前寝ボケてっと10連くらわすぞ　コラ！」

「来いや！はね返してやんよ！」

「ムグムグ」

「あ・・・あの～お二人のフルコースにそれぞれ入れたらいいんじゃ・・・」

「「ならぬっ！！」」

「ど、ど～して？」

「「なんか嫌（ヤ）だし食材かぶるの！！」」

「何ですかその理由わ

良いじゃないですか別に」

「ならん！ここはプライドにかけてオレの肉料理に！！」
「いや！オレのメインだ！！」
「いや」
「いや」
「ウチはトリコのフルコースに賛成だし～」
「うっせ～っぞリン！お前は黙ってろ！」
「うっさいのはお兄ちゃんだし」
「食事しようか？龍、小松君」
「だな」
「そうですね」
「ってか少しお土産に貰っていいかな？」
「いいじゃない？」

優奈のフルコース　スープ　前編

「う～ん♪おいし～♪」

俺は今師匠の別荘でジュエルミートを師匠と優奈に食べてもらってます
快晴の下で海は輝き、海風が心地いいです
最高に美しいシチュエーションだ

「ジュエルミートは美味いの」

師匠は尋常じゃないぐらい光ってます
優奈も俺とサニーに負けず劣らず輝いてます
俺は虹の実ワインをグラスに注ぐ
七色に光るワインは波からの反射で輝きが増している
俺はワインを飲む

「っで師匠なんで俺を呼んだんだ？」
「おうそうじゃったな優奈が自分のフルコースに入れたい食材があるから
龍ちゃんに付いて来てほしいと言われての」
「それで俺呼んだって訳か・・・」

ワインを注ぐ
師匠は海の上を跳ねて何所かに行った

「何で海を上を跳ねられるんだ？俺も人の事言えんが・・・
で？何えを捕りに行くんだ？」
「ＢＢコーン」

ＢＢコーン

その昔、グルメ貴族たちのおやつだったというポップコーン
ＢＢコーンというのは通称で、正式名称は「ブルーブラッドコーン」
ＢＢコーンを調理するためには、極めて強力な火力が必要だが、いきなり高温に熱すると表面が焦げてしまい味が落ちる
まずはゆっくりと中から温め、徐々に温度をあげていくのが調理のコツだが
油断するとすぐに焦げてしまうので目が離せない
最終的には１２００度の高温が必要となり、ポップコーンに調理する場合の捕獲レベルは３０を超えるともいわれている。
調理に成功すると、一気に弾け、たった一粒でもポップコーンの雨を降らせる。
まるで綿あめのような大きさのそれは、揚げたてのコロッケのように香ばしくかおり、食欲をそそる
噛むのを忘れて飲み込んでしまうほど口当たりがよく、うまい
グルメ界の猛獣たちの大好物でもあり、テリーの主食

＞引用＜
圧倒的な香ばしさとコク
たった1粒を強力な火力で炒り爆発させれば、たちまち１００人前のポップコーンに変身する
取引も1粒数１０万単位で行われ、１本丸々なら末端相場で１０億は下らない、まさにコーンの王様

捕獲レベル：３０

「ＢＢコーンか・・・貴族を意味するブルーブラットの頭文字をとり正式名称『ＢＢコーン』だがそれはトリコの前菜（オードブル）だぞ？」

「だったらトリコに入れていいか聞いてみるよ」
「そうか・・・ＢＢコーンとなるとウージャングルかグルメ界だな」
「グルメ界だと帰って来るのが面倒だしウージャングルにしようよ」
「だな、でもウール大陸となると遠いな今回ジャコウは連れて行けないな」

ウール大陸に行くとすれば海を渡らなければならない
俺はマッハヘリを持っているがジャコウは連れて行けんな

「ねえ早く行こう！」

優奈は大きい胸を押し付けてくる
ちょいとやめてほしいな

「分かった分かっただから少し離れろキー出せんだろ？」
「い・や♪」
「だったら俺は行かなくて良いか？」
「それはだめぇ！！」

優奈は泣きそうな顔で俺の腕を掴む

「行くから泣くな」
「ハ～イ♪」
「たっく切り替えが早いと言うかなんというか・・・」

俺と優奈はマッハヘリに乗り込みウール大陸に向かっただが

「おい優奈なんで俺の膝の上に乗る？」
「だってお兄ちゃんの体温を感じていたいんだもん♪」

「はあ・・・操縦しにくいんだがな・・・」

でもウール大陸まで遠いな

俺もは普通のマッハヘリより2倍早いけど
それでも半日はかかる
・・・つまり優奈は後半日このままかよ・・・
半日後・・・
着いたはいいが・・・
膝が痺れてる・・・
立てないことはないがな
まあマッハヘリはこのままで良いか
バリアシステム特典でつけたし

「ここがウール大陸かぁ～」

優奈は周りを見回している
俺は足元に花が咲いている事に気付き屈んだ

「こいつはピースフルフラワーか」

ピースフルフラワー

通常は、世界一平和な島ピースフルアイランドに咲く花
北ウール大陸でも自生が確認された
穏やかな環境を好み、殺気立った生物が近づくと、その花びらを散らせてしまう
花びらは全部で6枚あり、捕獲レベル10程度の実力の持ち主の殺気で1枚の花びらが散る
つまり、ピースフルフラワーの花びらが半分散れば、捕獲レベル5

程度
２枚散ればレベル１０程度であり、遭遇した相手の実力をはかる目安となる

「珍しいなこんな所に咲いているとはな
いくつか積んで行くか」

俺は３つほど花をもぎベルトにさした

「さあ行くぞ」
「ハ～イ♪」

俺達は南に見える森を目指し歩き始めた
見渡す限りの平原ここでピクニックでもやったら気持ち良いだろな
まあスリルとデンジャランスＭＡＸだろうがな・・・

「流石に暑いな・・・」

時計の温度計を見ると３２度
そりゃ暑いわな

「あ！あれ酒ヤシの実じゃない？」

優奈が見つけた木にはヤシのような実がなっていた

酒ヤシの実

割ると中から甘いお酒が出るヤシ
天然で発酵した酒は、まるで上質なリキュールのようにまろやかで飲みやすいとか

俺は懐から針を2つ取り出し実のなっている部分に投げ
2つほど実を落とす
トリコのナイフで半分に割り飲む

「うん美味い」
「これ美味しいだよねぇ～」

俺達は飲むながら森に向かうが
夜になってしまった
しょうがないでキャンプを張る事にしました
酒ヤシの中身を薪にぶっ掛け指の摩擦で薪に火をつける
俺は白菜と豚(ピグマ)の挽肉の調理を始める
まずは白菜を細かく切り
フライパンに油を引き細かく切った生姜を炒める
そして挽肉を炒め始め赤い部分がなくなったら白菜を入れ
炒めながら混ぜる
白菜から水分が出てきたら新たに水を加え少し煮詰めたら
水に溶かした片栗粉を加えとろみが付いたら出来上がり

「お～い出来たぞ」
「こっちも炊けた～」

ご飯が炊けたようだ
ご飯を茶碗に盛ってその上からあんかけを掛けて・・・

「「この世の全ての食材に感謝をこめていただきます！」」

箸で掬い一口・・・

「ん～まろやかなあんかけがジューシーなピグマを包みに白菜のシャキシャキ感！
うめぇ～！！」
「やっぱり簡単だし美味しいね」
「そうだな」

こうして俺達は夕食を堪能しテントで眠りについた

優奈のフルコース　スープ　後編

さて朝になり適当に食事を取りウージャングルに向かう
余談だが寝てる間に優奈にキスされそうだったが意識の一部が覚醒していたから回避できた
着いたはいいが・・・不気味だ
まだ朝だと言うのに暗い

「・・・暗いね」
「俺には明るいがな」
「じゃあお兄ちゃんにくっ付いていかないと！」

優奈は腕に抱きついてくる

「はあ・・・何処でこんな子になっちゃったんだろう・・・」

俺は転生する前の生活を後悔していた
森に入り木を登る
ＢＢコーンは森の上に実っている
そのため木を登る必要がある
優奈は俺に抱き着いたままなのでお姫様抱っこをし
カベジャンプをしながら登っていく

「あとちょい！」

足に力を入れ一気に木を抜ると
木の葉の上から大小様々のＢＢコーンが実っていた
そして俺は着地した
そして渋る優奈を降ろす

「にしても・・・こんなに実ってるとはな・・・」
「あのでっかいのなんてどう？」
「あん？でかいの？」
優奈が指差す方を見るとまるでタワーのような巨大なＢＢコーンが実っていた
「でか！」
「ねえ！はやくいこ！」
優奈は俺の腕を引っ張る
「おい引っ張るな」
引っ張られながら巨大ＢＢコーンに到着
だが皮が剥がれている
「これってトリコがもう来たんじゃないか？」
「みたいね」
俺と優奈はジャンプしＢＢコーンが見えている部分に到達する
「こいつがＢＢコーンか・・・香ばしい甘い匂い・・・
普通のトウモロコシなんて比にならないぐらいだ・・・」
「でもどうやって収穫したら良いんだろう？」
優奈はＢＢコーンを引っ張るが取れない
「・・・内側から衝撃を与えないとダメだな」

俺は内側に回り左腕に力をためる

「3連！釘パンチィ！」

3重の衝撃が波状的なダメージをあたえBBコーンをはじき出す

ぽん！ぽぽん！！ぽぽぽぽん！！！

銃の弾を撃つ音より強く優しい音と供BBコーンが飛び出た

「やったぁぁぁ！！！！！」

優奈は飛び上がっている

BBコーンを回収するためにBBコーンから降りる

すると

「ありがと～！おにいちゃ～ん！！！」

優奈はまた抱きついてくる

「有難うお兄ちゃん！愛してる～！！」

「解ったから離れろ、ホラ帰るぞ」

さっさとBBコーンを回収し折れは歩き始めた

「あ～んまってよ～いけず～」

俺達が木から降りると小松君とティナ、ヨハネス、サニーがいた

「あれ？サニー？」

「龍？それに優奈？」

「お久しぶりです」
「龍さん！」
「小松君」

小松は俺の姿を見ると大声を上げる

「誰？」

優奈は小松君と面識がないため頭に？を浮かべる

「あの龍さんは何でウージャングルに？」
「ああ優奈のがＢＢコーン収穫のための付き添いだ」
「優奈？」
「私が優奈です、龍お兄ちゃんの妹です」
「あッご挨拶が遅れました、僕はホテルグルメの料理長をさせてもらってる小松と言います」
「宜しく」
「ッでなんで小松君は此処に？」
「ウールスターソースの実を採りに着たんです」
「ほ～って帰らなくて良いの？ってかホテルの厨房使っても良い？」
「あっは、はい！もちろんです！」
「よっしゃ！華麗なフライトで帰るぞ！」

さっさとマッハヘリの起動させサニーのヘリを追う
そしてホテル到着

「サニーの奴無茶な着地しやがって」

っといいながら屋上に着地し優奈は厨房でＢＢコーンを調理する
そして俺は小松君の所に向かう

そこではトリコがポップコーンを持ってきた所だった

「トリコ」
「おお！龍！」
「こいつがＢＢコーンポップコーンか・・・っていうより綿飴だなこりゃ」
「龍も食おうぜ！」
「ああ、でもそろそろ・・・」
「お兄ちゃん！できたよぉ～！でもいっぱい作っちゃった」

優奈がＢＢコーンポタージュを持ってきた

「おお！優奈！」
「あ！トリコ！ねえフルコースはどう？」
「ああオードブルをＢＢコーンにしたぜ！」
「ああトリコ悪いが優奈のフルコースにＢＢコーン入れてもいいか？」
「スープにこのポタージュを入れたいんだけど・・・」
「なんだそんな事かよ！良いに決まってじゃね～か！」
「ありがとう！じゃあこのポタージュもみんなで飲もう！」
「おっしゃあ！！」

俺達は手分けして皆にポップコーンとポタージュを振る舞った
みんなは食べ始める

「ん～！うめ～！香ばしいコーンを更に香ばしくしやがるこのソース！
ついつい手が伸びちまう！もう加速がついてとまらね～！！
そしてこのポタージュ！！甘いが全くしつこくない、まったりとしつつ爽やかだ！

このポタージュにポップコーンをつけると更に甘みが増してそしてコクと匂いと風味が
一層増しやがる！やべぇ！もう止める事が出来ね～！！！」
トリコはポタージュを絶賛しながら食いまくっている
「うめぇ！なにこれ！？髪が更にキッラキラになっていくんだけど！？」
サニーの髪が光っている
「あっそうかヘルフォートレスのとぎ汁入れたからな？」
「あっやっぱ淹れたのか？」
「龍！」
サニーに詰め寄られる
「何だよサニー」
「ヘルフォートレスってお前のフルコースの一品だよな！！！？」
「ああ」
「そのとぎ汁ってどんな効果があるんだ！！？」
「美容と滋養強壮の栄養を多く含み全身の疲れ、肌荒れ、枝毛、疲労回復
肩こり、血行を良くするなどの様々な効果があるぞ特に髪には絶大な効果がある」
「マジで！！？」
「ああこんどとぎ汁のスープやるよ」
「サンッキュ！！！」
サニーはメチャクチャ喜んでいる

「とにかく優奈」

俺は優奈の頭に手を置く

「あ・・・／／／／／／／／／」

「おめでとうなスープ　ＢＢコーンのコーンポタージュ決定だな」

「うん／／／／／／／／／／」

こうして宴会は夜遅くまで続いた

満腹都市グルメタウン

俺は今電車に乗りある場所に向かっている

「・・・」

ちなみに俺は伊達眼鏡を掛け帽子をかぶり変装している
俺はトリコと同等以上に顔が知られているため騒がれないように変装をしている
一見すれば俺だとは分からないだろう
そして電車から降り目的地に到着した
グルメタウン

グルメタウン
通称「満腹都市」
最高十星のレストランが入っているグルメタワーや節乃食堂などがある大都市で
駅の平均利用者数は２５００万人以上と言われる

俺は受付でゴールドのグルメＩＤを通し入る
俺は適当に水晶コーラを買い飲みながらホネナシサンマを食べる
炭火で風味が増し焦げた部分の匂いが食欲をそそる
俺はグルメデパートで適当にぶらついてる
そしてデパートを出てぶらつく
するとトリコと小松君、そして

「あれ？節乃さん？」
「おや龍じゃないか」
「トリコ達も」

「おお龍！これから俺達節ばぁの店に行くんだ！お前も行こうぜ！」
「・・・嫌遠慮しておくよ俺は用があるから」

俺はトリコと別れ酒場で酒を飲む
ここはヘビーロッジ
今も直変装はしている
そしてトリコ達、カーネルが来た
俺はトリコ達とは別に行動を始めた
アイスヘルでは美食檜副料理長トミーロッドを先に叩く！
俺の誇りにかけてトリコ達を危険な目は合わせない
この世界は俺と言う異物を受け入れている
元々この世界には俺はいない
トミーロッドと俺との実力差は明らか
だが舞台はアイスヘル
俺の体は極度に寒い地域では鈍る
それで負ける可能性も高い
なら道連れにするまでだ

出陣！アイスヘル！ってえ！？節乃さんの呼び出し！？

さあて港にはでかい船それでアイスヘルまで行くはずだった・・・
プルルル
ん？電話？

「はい？」
『龍ちゃん、節乃から呼び出しがかかっとるぞ』
「え！？なんで！！？俺これからアイスヘルに！！」
『そんなのどうでも良いからはよいかんかい！！』
「しょんな～・・・とほほ・・・」
『それにお前はグルメ界やアイスヘルみたいな寒い所に行くとトラウマが出るじゃろ？』
「それは明らかに師匠のせいですけどね」

電話を切り節乃食堂に向かう
向かうときに船が出てしまった
ああ・・・センチュリースープが・・・
しょうがない小松君に頑張ってもらいましょう
ちなみにトラウマは師匠に植え付けられたものだ
・・・いうのも恐ろしい・・・
俺が節乃食堂に行くとドアの前に節乃さんが居た

「なんですか・・・呼び出して・・・」
「うふふふやっぱりアイスヘル行こうとしてたの」
「ええおかげさまで船に乗れませんでしたよ・・・」
「そりゃ悪い事したの～っでもちと頼みがあってな」
「頼み？食材の調達ですか？」
「あたしゃと一緒にアイスヘルに行ってほしいんじゃ」

「なんで？」
「おそらく美食檜が来ると思うしトリコ達の迎えじゃ」
「はあ・・・俺がアイスヘルに行こうとした目的それなんだがな・・・」
「お前さんだけが行ったらアイスヘルがただじゃ済まんわ！！」
「！！何！？俺メッチャ信用ないわけ！！？」
「その通りじゃ」
「・・・」

精神に７０００のダメージ・・・
こうして俺はトリコ達とは遅れてアイスヘルに行く事になった
ってか俺連れて行く必要あんの？

「信用ないからじゃ！この前無人島割ったばかりじゃろう！！」

ああ・・・そうだった・・・

アルファロ

え～只今アイスヘルに到着して所でございます
あの後首に一発入れられて軽く意識飛んだんだもん！
節乃さんの手刀・・・強すぎ・・・
それ俺、首弱いから
主に原因は優奈だが・・・
今は美食會のボスの側近
アルファロ、支部長が二人居る

「うっふっふ寒いねぇ～ここがアイスヘルか思わず白い息が出てしまうわ」
「大丈夫？」
「うっふっふ心配は無用じゃよ」
「白い息それはつまり・・・体が鈍っている証拠では？節乃さん・・・」

アルファロが口を開く
「『美食人間国宝』と『蛇龍覇王』と名高い貴方達がこんな場所に一体なの御用で？」
「ふん・・・貴様に言う思うか？」
「うっふっふ偉そうになったのうアルファロ・・・
主らのボス・・・あの『暴食バカ』は元気かえ？」
「美食會〔われわれ〕のボスをそう呼べるのは世界でも数人でしょう節乃さん
あなたがうちの厨房に入って、蛇龍覇王もうちに来ていただければボスもさぞや
お喜びになるとおもいますが・・・」
「うっふっふあいにくあたしゃの扱う食材はあのバカを求めてはお

らん
お客は食材が決める」
「俺も同意見だ俺達はトリコ達を迎えにきたんださっさとスープ持って帰れ」

アルファロは懐から何かを忍ばせている様だ
俺と節乃さんは同時にオーラを出す

「しまいなさい・・・」「失せろ・・・」

ビキビキ・・・
アルファロの懐から粉々になった物が落ちてきた
アルファロはてをあげて

「・・・なんだ鈍ってないじゃないですか・・・行きますよ」

アルファロは二人を連れて去って行った

「うっふっふ龍や、また一段と鋭くなったの～」
「いえいえ節乃さんには敵いませんて」
「さて、リムジンクラゲに戻って上からトリコ達が出てくるのを待つじょ」
「はい」

アンケート　嫁募集

「どうも作者のアルトアイゼン・リーゼでございます」

「主人公的なポジションをやってる龍人です」

「ここでアンケートを取りたいと思います」

「なんの？」

「ヒロインですよ、だって２５でしょ？結婚考えないと」

「そんなもんか？」

「そんなもんです、まあ候補としては・・・

龍神　優奈

二代目メルク

って所ですかな？」

「優奈が入ってるかよ・・・にしてもメルクか・・・」

「それと新しいキャラでも構いません」

「新オリキャラか」

「ええ、出来れば設定も頂けば最高です」

「自分でも考えろ」

「はい精進します」

「「ではお待ちしております！」」

仕事依頼

俺はトリコ達を節乃さんのリムジンクラゲでライフ送り届けた後
俺は自宅に戻った
久しぶりの我が家・・・
俺はＴＶを付けソファーに寝転んだ
・・・面白い番組はやってないな・・・
俺はパソコンを起動させネットでもやろうとしたら
メールが来た
俺のパソコンのメアドを知ってるとなると限られる
まずは師匠、優奈、メルク、節乃さん、ココ、サニー、トリコ
マンサム所長、次郎先生・・・めんどいっでその他
俺はメールを開く

『我が友　龍人へ
元気でやってるか？こっちはボチボチだ
それで仕事の依頼をしたい
俺はもうすぐ結婚するんだがライトニングフェニックスの体毛で
作ったウエディングドレスを着てもらいたい
それで捕獲を依頼したい
返答待っている　Ｂｙ　ラウル』

・・・ライトニングフェニックスか・・・捕獲レベルは７５
・・・面白そうだな・・・肉も美味いって言うし
フルコースのメニューが決まるかもな・・・
俺は『ＯＫ』とだけ書いてメールを送った

ライトニングフェニックス

俺は電話でラウルと話している所だ

「ああそうだこれから向かう」
『にしても悪いな俺の我が儘で』
「いいんだよお前はお得意様で親友だ、今回も無料(タダ)で良いぞ」
『悪いって・・・金は払うって・・・』
「気にするなってじゃあな」

ピッ
さて行くか

「ジャコウお留守番宜しくな」
「ギュルルル♪（いってらっしゃ～い♪）」
「ガジェットフェザァァァァ！！！」

俺はジャコウに手を振られながら
俺はガジェットフェザーを展開し俺は飛び立った
さてここでラウルの説明をしておこう
ラウルは一流の修理業者であり一流の情報屋でもある
奴は俺が美食屋になって始めて依頼人でもあり俺の親友でもある
アイツは何時も俺に仕事の依頼をしてくれる
アイツは何故かスパロボのラウルそっくりだ
しかもその婚約者がミズホというらしい
幼なじみで昔からの馴染みで何時の間にか好きになってしまったらしい
しかもそれが両思いと解った時は死にたくなる位の幸せに襲われた
それで今度式を挙げるのだがそれでウェディングドレスを作って

結婚式で着てほしいそうだ
ライトニングフェニックスの体毛で作られた衣服は美しく光り輝き
この体毛で作られたウェディングドレスを着て結婚した花嫁は
永遠の幸せを手にすることができるという言い伝えがある
それで自分の力ととそれで幸せにしてあげたいそうだ
それで俺に依頼をしてきた
ゴロゴロ・・・ビシャ～ン！！！
目の前は積乱雲が見えてきた
あそこに居るかな？
俺は迷わずに積乱雲に突っ込んだ
強い風と雷が俺を襲う

「おうおうすげぇながグルメ界のサイクロンや嵐に比べたら
こんなの楽勝だ！！」

更に速度を上げ積乱雲の中を進む
すると数百という雷か俺に向かってきた

「！！プロテクトシェード！！！」

左手に展開したジェネシックの腕を展開し
バリアを全方位に展開し雷を防ぐ

「・・・びっくりしたな～電圧は数百ボルトぐらいかな
このぐらいなら防御しなくて良かったな・・・にしても・・・」
俺の目の前には雷を纏ったライトニングフェニックスが現れた
そいつは俺に突撃してきた

「来い！！」

するとライトニングフェニックスはいきなり俺を背に乗せ一気に下降した
あまりの速度に俺はライトニングフェニックスにしがみ付いてしまう

「は、早いぃぃぃぃぃ！！！！！」

そして数分後地上に着き俺は地面に降りた

「はあはあ・・・」

呼吸を整えているとライトニングフェニックスは頭を下げてきた

「は？」
『・・・アナタ・・・スゴイ・・・』
「な、なぁぁにぃぃぃ！！！」

ライトニングフェニックスが喋ったぁ！！？

『ワタシハムカシナカガイイヒトガイテソノヒトシャベリタイイッシンデ
レンシュウシタラシャベレルヨウナッタノ』
「凄いな・・・で何で俺に頭を下げるんだ？」
『ワタシハワタシガミトメタヒトニエイキュウにツカエテマモルコトをキメタンデス
アナタニ・・・ツカエタイ・・・／／／／／／／／／／／／／』
「・・・ふっ宜しくな」
『ハイ！主様！！』
「急に漢字になったな」
『文字ニツッコミハナシデス』
「でお前の体毛が欲しいんだがいいか？」

『ハイチョウド体毛ガ生エ変ワル時期ナノデ』

すると体毛が一気に抜け
新たに体毛が一気に生えた

「お～すごいな・・・まあこれで依頼は達成だな」

俺はリュックに体毛を入れた

「さあ行こう」
『ハイ！主様！！』
「俺の事は龍人でいい」
『ハイリュウト様！！！』

俺は背に乗りラウルとの待ち合わせ場所に向かった

引き渡しと・・・悪魔の実？

俺はライトニングフェニックスのライネスの背に乗り
約束の場所であるラウルの作業場に向かった
そこは海が一望できる崖の上に立てられた家っと言うより工場
玄関前ではラウルが腕を組んで待っていた
アイツはいつも待つ時は腕を組む
そして

「お～い！結婚前のラウル～！！」

ラウルは顔をまっ赤にし何処から声がしたか辺りを見回す
そして上を向いてなっ！！っ的な顔をした

「ははは驚いたか？ラウル？」
「驚くに決まってるだろ！！それになんだよ！結婚前のラウルって！？」
「事実だろ？」
「う・・・／／／／／／って予想の遥か上を行ったな・・・
おれはせいぜいノッキングしてるか仕留めてるかのどっちかと思ったが・・・
まさかまたタナトスと同じく相棒（かぞく）になったのか？」
「ああアイツと同じく仲間（かぞく）だ」
「相変わらずの好かれようだな・・・」

すると玄関のドアノブが回った

「ラウル～お客さんですか～？」

中から出てきたのはラウルの嫁　ミズホだった

「あ！龍さんこんにちわ」

「あいこんちわ」

「でもなんで龍さんがここに？」

「ちょいと届け物でね」

「届け物？」

俺はリュックから綺麗に纏められたライネスの体毛を出した

「こ、これって・・・」

「そうだここに居るライトニングフェニックス、ライネスの体毛だ」

「わぁ～！！これが！！！！」

「すげぇなこれ・・・」

「さあこれでウエディングドレス作りなそして式挙げて
さっさと結婚しろ」

「「／／／／／／／／／／／／／／」」

二人の顔は熟れたトマトのように赤くなる

「おうおう赤くなってトマトかお前ら？」

「「／／／／／／／／／／／／／／」」

「誰が更に赤くなれと言った・・・はあじゃあなお幸せに」

半ば呆れながらライネスの背に乗り俺の家に向かった
家の前ではジャコウが髪を弄りながら蟹ブタを食っていた

「ただいまジャコウ」

「ギュ・・・ル？」

ライネスから降りジャコウに挨拶するとジャコウは?を頭に浮かべている

「?ああこっちはライネス新しく仲間(かぞく)になったんだ」

「ギュルルル」

『宜シクオ願イシマス』

俺は近くの岩に座りリュックの中を整理する

すると不思議な模様をした果物が出てきた

「あこれ・・・何の奴だったかな?ちょっと調べてこよう」

果物の模様と色を記憶し家に入る

サイドジャコウ&ライネス

注意ここではジャコウも言葉を喋りライネスもカタカナではありません

「俺の名前はジャコウだ改めて宜しくな」

「こちらこそ私の名前はライネスです」

手と翼で握手する

「んで?」

「?」

「いったいどういう経緯で相棒に取り入ったんだ?」

「と、取り入ったて・・・」

ジャコウの言い方に少したじろくライネス

「私はただ・・・私のお家には入れられたから全方位から
５００万ボルトの雷で攻撃したけどそれを防がれて惚れただけです
！！」

自信満々に言うライネス

「んだそりゃ・・・」
「ふふん！まいったか！」
「誰が参るかこん雷姉気味壊れドリ」

アッサリと悪口を言うジャコウ

「ななあ！誰が雷壊れドリですてぇぇ！！！」
「てめぇだてめぇ耳でも遠いのか？良く聞きやがれ雷姉気味壊れドリ」
「ブチ！！もう怒った！！覚悟なさい！！私の雷で黒焦げにしてあげるわ！！！」
「おおやれるもんならやってみろ！！相棒も認めた毒を受けてみやがれ！！！」

ライネスは雷を纏い空気がバチバチいっている
ジャコウは不吉なオーラを出し体は黒紫に光っている

「「・・・やっぱやめた」」

同時に言う二人

「「これから家族なのにこんな事やっても意味無いし（な）」」

なんだかんだで息がぴったりなふたり

「何か小腹が減ったな・・・」
「何かないのですか？ジャコウ？」
「なんで上から目線なんだよ」
「いいじゃない」
「はあ・・・」

ジャコウは3つある目で何か食えそうなものが無いか探す

「・・・みあたらｎ」
「あ！あった！！」

ライネスが見つけたのは2つの果物

「何のために探したんだか・・・」
「まあいいからいいから」

ライネスは1こをジャコウに渡す

「にしても・・・こんな果物見たこと無いな・・・」
「まあ食べようよ」
「まあいいか」

シャクリ・・・
二人は良い音を立てながら丸ごと食べた

サイド龍人

調べ物を終え外に出て見ると置いてあったはずの果物が無くなっていた

「あり？」

当たり見回し探すとジャコウとライネスが固まっていた

「ど、どうした二人共！？」
「「ま・・・」」
「は？」
「「マズぅぅぅぅぅいぃぃぃぃぃぃぃ！！！！！！！！！！！！」」
「はあ！？」

何故に喋れる！？ジャコウ！？

「おい！ライネス！！何食わせてくれとんだ！！」
「な、何よ！私だってぺっぺ！食べたんだからいいでしょ！？」
「言い訳あるかぁぁ！！！？って相棒何某膳としてるんだ？」
「リュウト様？どうしました？」
「な、なんで・・・ジャコウ・・・ライネス・・・」
「「？」」
「なんで・・・人間の言葉をペラペラと喋れるだぁぁぁ！！！！？？？」
「「へ？・・・ってあ！！何で！！？」」
「っは！まさかお前らここに有った果物を食ってないよな！？」
「へ？食ったけど・・・」
「食べたかったんですか？でも凄まじく不味かったですよ？」

俺は思わず手を額に当てた

「はあ・・・ジャコウはお前は何色の食った・・・」
「お、俺か？俺は青だな」

「私は赤です」
「・・・良いかよく聞け・・・お前らが食ったのは悪魔の実だ」
「「あ、悪魔の実？」」
「ああ・・・悪魔の実は「海の悪魔の化身」と言われている・・・
食べた者は特殊な能力が身に付く
実には多くの種類が存在し、食べた事で得る能力も実の種類によって様々であるが
普通の人間では得る事の出来ない能力が身に付いて、戦闘などに応用すれば絶大な力を発揮するんだ」
「んな物があるなんて・・・」
「でもんな物が相棒が持ってんだよ？」
「あれは俺の能力で出した物だ
実の所俺も全ての悪魔の実の全てを把握してない
調べた所お前らが食ったのは動物系悪魔の実
希少種カミカミの実　ジャコウがモデル毒神　ライネスが雷神だ」
「ど、毒神？」
「ら、雷神？」
「能力者は人型、獣型、その中間形態（人獣型）の計３つの形態に変形できる
と言っても今のが獣型形態だと思うがな
ジャコウの能力はあらゆる毒を操り自在に操る事が可能
毒を形状変化させる事もできる」
「へぇ～」
「ライネスの能力は雷速で移動でき、電波を読み取り、通信や遠方の会話を盗聴できる」
「今の私の能力を更に強化した物と思っていいですね」
「（なんかジャコウはマゼラン、ライネスはエネルの能力を持った感じだな）」
「なあ相棒俺達人間形態になれんだよな？」
「ああそのはずだ」

そういうとジャコウの体は小さくなり
１８５ｃｍぐらいになり
紫の長い髪、目は赤、何故か紫の服を着ている
容姿は上の中と言った所か

「おおすごいな」
「・・・何か変な感じだ」

ジャコウは体を動かしながら言う

「動きづれぇな・・・」
「では私も」

ライネスの体も小さくなり
１８６ｃｍぐらいになり
金色の長髪、目はブラウン、またまた何故か金色と黄色の服を着ている
容姿はジャコウと同じで上の中だな

「・・・変な感じです」
「おおすげぇな」
「なあ相棒俺達このままでいいか？この姿に慣れたいし」
「私もです」
「ああいいぜ」

俺達は家の中に入った
さてさて悪魔の実を食った相棒達どうなるんだろう・・・これから・・・

龍「なんで俺の家のキッチンが吹っ飛んでんだ・・・てめらぁぁあ！！！」

今俺はソファに寝っ転がりボ～っとしている
ジャコウは料理本を片手に料理をしている
本には

『簡単且つ誰でもおいしくできるスイーツ！！』

と書かれていた
キッチンの方にチラリと目を向けるとページを一部が見えた

『美味しいホワイトアップルパイ！』

・・・なるほどなアップルパイか俺も好きだな
が包丁を持つ手がかなりぎこちない上手くできていない
するとライネスがヅカヅカとキッチンに入った

「あんた下手ね～貸してみなさいよ」
「あん！？邪魔すんじゃね～よ！！俺は今相棒と俺のためにアップルパイを作ってだかんな！」
「ちょっと待ちなさいよ！リュウト様の分は間違いなくいるわジャコウ、貴方の分も１０００歩ぐらい譲って理解できるわ、なんで私の分を作らないのよ！！？」
「新入りが何言ってんだよ！俺は信頼と俺の命を賭けても惜しくないに奴にしか作らん！！
相棒はな！俺が食われそうな時に俺を助けてくれたんだ！！
俺は相棒のために死んでも惜しくは無い！！」
「・・・いいわだったら勝負といこうじゃない」
「勝負だと？」

「これから二人でリュウト様のために料理を作ってリュウト様に食べて貰ってどちらが美味しいか
決めて貰おうじゃない」
「おもしろいじゃね～か」
「「勝負！！」」

そう言って二人は本を片手に料理を開始する

「え～と調味料ってどれ～！！？」
「ここがこうで・・・（トントン）」
「次は焼くの！？だったら電気で！！（バチバチ！！）」
「おい！止めろ！キッチン吹っ飛ばす気か！？」
「うっさい！黙れ！ジャコウ！！」
「ああ～ん！！」

・・・

「頼むから俺を心労で疲労困憊させないでくれ・・・」

結局

ドカ～ン！！

「にゃあぁぁぁぁあ！！！！！」
「だから言ったじゃね～か！キッチン吹っ飛ぶって！！修理代が幾らする思ってんだ！！
雷姉気味壊れドリ！！！！」
「力加減を間違えただけよ！失敗じゃないわ！！」
「明らかに失敗だろうが！！自分の失敗を認めやがれ！！雷姉気味壊れドリ！！！！！」

「ああん！誰がクソ喧しくてウザくてキモい雷姉気味壊れドリよ！！！？？」
「そこまで言ってね～だろが！！」
俺がトイレから戻るとキッチンが吹き飛んでいた
「・・・」
「だいだいな！！キッチンで雷を使おうとする頭が理解できね～んだよ！！」
「いいじゃん！加減できれば！！」
「その加減が出来てね～からこんな事になったんだろうが！！」
「だからこれは失敗じゃないって！」
「どこをどう見たら失敗じゃね～んだよ！？明らかに失敗だろうが！！自分の失敗を認めやがれ！！」
「煩いわね！台詞の使い回ししてるアンタに言われたくないわ！！」
「どう考えても関係～ね～だろうが！！」
「・・・（ニコニコ）ジャコウ君♪ライネスちゃん♪」
「「ああん！！？・・・」」
「（ニコニコッ）」
「「・・・（汗ダラダラ）」」
「これはどういう事のかな？なんで俺のキッチンが吹き飛んで原型を留めてないのかなぁ？」
「そ、それはだな！！相棒！！ラ、ライネスがキッチンで雷を使ってだな！！」
「ちょちょっと！！あたしだけのせいにする気！！？」
「明らかにお前のせいだろ！！！！！！」
「うんでもねジャコウ♪」
「は、はい・・・？」
「なんで止めなかったのかな？使ったら吹き飛ぶと解ってたら何で止めなかったのかな？」

「あ・・・いえ・・・その・・・と、止めたんですけど・・・」

「うん解った解ったお前ら二人共・・・」

「「・・・（ダラダラダラダラダラダラ・・・）」」

「処刑じゃあぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

「「ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！」」

アンケート　嫁募集途中結果

「どうも作者のアルトアイゼン・リーゼでございます」

「主人公的なポジションをやってる龍人です」

「嫁アンケートも中盤に入ってきました今の所の候補は虚空さんから頂いた
オリジナルのキャラさんとも含めて４名と群雲さんの設定を元にしたキャラが１名
全員含めて５名となりました」

「・・・よく最初の２名から５名になったな？」

「これも皆様のお陰ですよでは候補者の自己紹介とまいりましょう

まずは龍人の妹でありその美しさ故に二つ名は女神
そして心から龍人に恋する乙女、龍神　優奈！！

２人目は龍人の愛刀を作った天才研ぎ師
二代目メルク！！

３人目は新しい龍人の相棒を務め雷を操る雷神となった
雷鳥ライトニングフェニックスのライネス！！

４人目は虚空さんから頂いたオリジナルキャラ！
弓は達人の領域！！　永久（トワ）　満月（ミツキ）！！

５人目は　群雲さんの設定を頂き考えた

史上最年少で７つ星（ＩＧＯの定めた世界１００位内）入りした天才女性料理人！！
天魅（てんみ）　葵（あおい）！！

この５名です！！」

「なんでライネスがいるんだよ！！明らかにおかしいだろうが！！種族が違うだろう！！」

「大丈夫だろ？愛さえあれば？」

「なんだよそれ！！・・・ああもういいやでは・・・」

「「ではお待ちしております！」」

やばい・・・妹相手に理性が・・・（前書き）

エロあり？

やばい・・・妹相手に理性が・・・

さて二人への○・・・ゲフンゲフン・・・お仕置きが済んだ所だ
まあ能力の慣らしも兼ねて二人には美食屋になってもらい俺が依頼をした
ライネスはエスカアルゴ、イービルハンター、ゴルゴロプス　（全てグルメピラミッドで捕獲する事）
ジャコウはオゾン草、マシュマロカボチャ、メガオクトパス、ヘラクレスドラゴン
ジャコウとは付き合いが長いためライネスより困難な物にした、得にメガオクトパスはつらいぞあいつタコ苦手だし、まあ克服する良い機会だろう

「私の事実に変える〜なんで〜？誰もが〜くぎづけになる〜私は美しい女神〜（^^）」
今歌っているのは風呂に入っている優奈、先程帰ってきて風呂に入っている
でもなんかどっかで聞いた事あるな歌詞が

「ふう〜気持ちよかった〜（＊^^＊）上がったよ〜♪」
「おうそう・・・か・・・」
俺も入ろうと振り返ると湯気を纏い、タオルを羽織っているが大きい胸が隠れきっていない
風呂上りなだけあって色気が異常なほど増している

「なななんでそんな格好してんだよ！！！／／／／／／／／／」

「え～？お風呂上がりだもん、でも本音はお兄ちゃんの誘惑♪」
「なななななに言ってんだ！！こんアホ！！！／／／／／／／／／／／／／／」
「でもお爺ちゃんは結婚していいって言ったよ？」

俺の顔は蒼白になる
あんクソジジィィィィィィィィイイイイ！！！！

その頃の一龍・・・

「そろそろ初孫が見れるか？でも儂としたは龍人×メルクの娘でも良い気はするがのう」

視点は戻る
俺は師匠に報復を誓いつつ後退りをする
優奈が刻々と接近してきているからだ・・・

「もしかして優奈の裸を見て興奮しちゃってるんだ？」

小悪魔のようなちょっと意地の悪い微笑みを浮かべる

「お、俺だって男なんだぞ！？／／／／優奈みたいな奴の／／／／・・・を見たら、変な事しねぇって自信はないんだよ！！」

理性の極限を感じ始める俺は悲声を上げる。
これ以上優奈の、幾らバスタオルを巻いているとはいえ裸を見せられたら間違いを起こさない、という自信を俺は持てない

「そぉなのぉ？私は別に構わないんだけどなぁ♪お兄ちゃんが私に変なコトしても

私の心は龍人お兄ちゃんを愛するために、私の身体はお兄ちゃんに愛し愛されるためにあるんだもん」

恐ろしいほど色っぽい声を出す優奈
俺の理性がガリガリと掘削されていくのが解る
まずい・・・このままでは・・・妹に理性が・・・持たない・・・

「ああ・・・」
「さあ・・・お兄ちゃん・・・行きましょうね・・・？ベットルームへ・・・？」
「う、うわあぁぁぁぁあ！！！！！」

俺は家を飛び出し真っ直ぐにメルクマウンテンに向かった
はあ？ライネスかジャコウじゃないのかって？当てになんね～っつの！！
ここは俺の知っている女性の中で一番常識に精通しつつ優しいメルクの所に行くしかない！！
違う！あれは俺が愛情を注いだ優奈ではなぁぁぁぁい！！！
俺は涙を流しながらメルクマウンテンに向かってガジェットフェザーで飛び進める
メルクぅぅぅう！！！

「・・・はっ！なんだろう・・・龍人の悲痛な叫びが聞こえた気が・・・」

愛刀　『覇鎧龍』

シャッ・・・シャッ・・・どうも何時もどうりにいかないな・・・
あっどうも初めまして、僕の名前はメルクと言います、前は俺という一人称を使っていましたが
一人の時や友人と会う時は僕にしている
でも今日は調子が悪い、いつもなら一回で出来るはずの作業に数回も費やしている
・・・シャッ！！・・・ふう・・・やっと今日の分が終わったよ
先程僕は僕の初恋の人である龍人の悲痛な声を聞いた気がしてならなかった
なんでだろう・・・もしかして優奈ちゃんが何かしたんじゃ・・・
あり得る事だ・・・
僕は数年前に此所を訪れた龍人が修行のためにヘビーホールに行き
初代の言葉を教えてくれた
僕はその時、思わず泣いてしまってその時優しく慰めてくれた龍人に胸が、きゅんっとしてしまった
それが初恋なのか経験のない僕には分からないけど・・・
その時！どごん！

「わ！何！？」

突然外から強い衝撃波が！急いで外に出るとそこには膝を着いて涙ぐんでいる龍人がいた

「りゅ！龍人！！？」

僕は思わず龍人に駆け寄った、全身の服が所々破れたり、濡れている

「メ、メルクゥゥゥ・・・」

龍人にいつも面影は無くまるで何かに怯える子供の様だ、僕の名前を弱々しく口にしている

「と！とにかく中に入って！ね！？ほら！頑張って立って！」

龍人は呼吸がままならないほど泣きじゃくっている・・・一体何が！！？

とりあえず中に入れないと！此所は今日の天候からしてかなり寒くなる！

龍人を立たせて二階の布団に寝かせるでもその時でも尋常じゃないぐらい怯えるように振るえている

それに平行して涙が止まらない、あわわわどうしたらいいの～！？

はっ！そうだ！

僕は優しく尚且つ甘く母親のように龍人の手を握った

「安心して龍人、僕が付いてるよ。だから落ち着いてね？」

「ヵ・・・」

「ん？何？」

「おかあ・・・さん・・・」

龍人はゆっくり目を閉じて寝息を立て始めた

「ふぅ～・・・でも龍人がこんなに怯えるなんて・・・どうしたんだろう？」

・・・

『ほらほら龍ちゃん、こっちこっち』

『こっちだぞ、龍ちゃん』
『待ってよ～お母さ～ん、お父さ～ん』
『おにいちゃ～ん、早く早くぅ～』
『今日は美味しい美味しいハンバーグですよ～』
『わ～い！ゆうちゃん！お母さんのハンバーグだいしゅき！！』

・・・俺は懐かしい夢を見て目を覚ました・・・
幼い時、母と優奈と父さん一緒にいた時の記憶だ
懐かしいな・・・やべ眠い・・・すう・・・すう・・・

僕は龍人が寝ている間に師匠が大部分を仕上げ最後の部分を僕が仕上げた
龍人の剣『覇鎧龍』を見ている、あの時以来見てなかったけど綺麗だな・・・
吸い付けられるような黒・・・そういえば龍人ってどんな女性が好みなんだろう？
気になるな・・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7324v/

トリコ　チートを持った転生者

2011年12月20日01時52分発行